

退職特集

“第2の人生について”

桜咲く春とともに卒業、入学、退職、新採用、異動と慌ただしいシーズンを迎えます。

今年、山口大学では、64人の職員が去られることとなりました。

今回は特集テーマを“第2の人生について”とし、山口大学を去られる退職者の方々に、それぞれの思いを寄せていただきました。

山口大学での道程



東 玲子

大学院医学系研究科
保健学系専攻 教授

私は、昭和41年に国立移管を1年後に控えた山口県立医科大学附属病院に就職しました。最初の20年間は医学部附属病院の臨床看護師として、続く22年間は教育職員として今日に至りました。この42年間を振り返ってみると甘苦さまざまなことがありました。今となってはすべてが懐かしく意義深いものであり、私に関わってくれた多くの皆様に感謝するばかりです。

前半の附属病院では、手術部、脳神経外科病棟、血液・代謝病棟で勤務しました。中でも最初の職場であった手術部は14年6ヶ月と長期に及び、手術に明け暮れた毎日でした。手術は局所麻酔で短時間で終了する小さなものから、前日から周到な準備をし、手術開始の2時間くらい前からピリピリ神経を張りつめ、手術室を機器類で埋め尽くし長時間を要して行われる大手術までさまざまでした。手術中は術者群、麻酔医師、看護師、医療工学士等の医療チームが目の前の患者さんの手術を無事成功させることだけを祈って一体になりました。ほとんど無言で手術が進

行していく状況は、静寂な中に清水が流れているような感覚を持ったものです。その境地に至るには、臓器に関する知識、術式、使用器具・材料、手順を理解し、さらに執刀者の好みを把握し、一步先を読む。そうして臨むことが専門職者としての気概であったようです。

後半は昭和61年の山口大学医療技術短期大学部への異動からスタートしました。元来、勤勉性に欠けると自覚していた自分が教育者に適しているか否か迷った後、自分の欠点がそこにあるとしたらそれに取り組むのもよいではないかと、少々不謹慎ながら就任しました。保健学科では、ほとんどの学生が医療職者になるという信念を持って入学して来ます。そのような学生に日々接し、めざましい成長ぶりに触発されながら、私自身が育てられました。入学時の学生は高校生気分を残し、行く先が懸念されるような状況もみられます。2年、3年、4年と上位学年になるごとに目を見張るほどの成長をしていきます。青年から成人へと当然の成長の成り行きともいえますが、それにも増して、自らの目

的を認識して、ひとりの医療従事者としての責任を意識しながら臨地実習で患者さんをはじめさまざまな職種の人々と出会い、それぞれの人の生き様に接することの効果には格別のものを感じます。毎年4年生がゼミを終了し卒業論文を提出する頃には、どの学生も立派な医療職者になり切って凛としています。この人たちの教師でよかったです。

本学の保健学科は看護学と検査技術科学の2専攻で構成されています。当該学問分野は他分野に比べると遅いスタートでした。学問的発展と地域への貢献を社会から要請され、国の施策により急速に進展しています。それに応えるために我々保健学科スタッフも一丸となって取り組んできました。そして今大学院博士後期課程が開設され、研究棟の全改修が進んでお

り、順調に教育体制および教育環境が整ってきました。ここまで至りましたことは、大学執行部、前・現医学部長、歴代学科長、そして保健学科の全ての先生方の強い意志と実行力、事務部の方々の温かいご支援によるものと深く感謝いたしています。今後この教育・研究環境を土台にして保健学科・保健学専攻が益々発展しますことを心より祈っています。



2006年3月8日、Sigma Theta Tau International日本支部「Tau Nu Chapter」の設立記念式典にて
(左から2番目が筆者)

第2の人生について

石原 得博

大学院医学系研究科
情報解析医学系専攻 教授

医学部入学の動機と変遷

私は瀬戸内海の孤島である平郡島で生まれ、中学1年生の時に小学校の教師であった父親の転勤で島を離れ柳井市立阿月中学校に転校するまで暮らしました。当時は柳井が町から市になる時に人口が4万人以上必要ということで、人口約4千人の平郡が大島郡安下庄町平郡村から柳井市平郡となりました。一時期医師が在住したこともありましたが、無医村であった時に一番下の妹が1歳で亡くなりました。それが医学部を目指した動機で、医学部に入学した当時は内科と外科以外は頭にありませんでした。しかし、専門1年生（現在の3年生）の時に病理学教室に先輩に連れていかれ、そのまま現在まで病理学を続けています。私が山口県を長期に離れたのは京都大学の当時のウイルス研に約3ヶ月間とアメリカ合衆国NIHに約2年間留学したのみで、根っからの長州（周防）人です。

大学時代の思い出

私は「和をもって尊しとなす」の言葉が好きです。山口大学が法人化する前に当時の廣中平祐学長（柳井高校の先輩）に命じられ、教育研究システム等検討ワーキン

ググループの座長として1年間で30回以上の会を山口大学の本部で開き答申案を作成しました。その時は渡邊正（教育学部）、植村（経済学部）、添田（人文学部）、増山（理学部）、濱本（工学部）、山内（農学部）および松田（医学部保健学科）の各教授に協力いただき、それを基に大学教育センターがスタートしました。医学部長時代には、医学系研究科の設置に関しても二外科の岡教授を座長として理学部、農学部、工学部や医学部の先生の意見の集約で良いものが出来たと自負しています。

地域医療

退職後は病理医として勤務するつもりでしたが、母と同居していた弟が急逝したので状況が一変しました。母は82歳で元気ですが、一人暮らしとなり近くに住まねばと考えている時に松崎病院長の肝いりで大島郡周防大島町での勤務

の話が舞い込んできました。今は僻地での医療という初心に帰って生まれ故郷を望めるところで微力ながら地域医療に貢献できればと考えています。

学部長時代に手がけた僻地医療の対策の一つとしての医学部医学科の推薦入学における地域枠の設定に引き続き、今回は山口大学と地域医療機関の橋渡しが出来ればと思っています。ただ、地方大学に医師が残らないことや、医療の集約化（特に、一つの科に3人以上の常勤医）に伴い、過疎地区的地域医療の現状は非常に厳しいものがあります。山口県の医療を長期的に支えるためには山口大学の援助なしには不可能です。ぜひ山口大学、特に医学部の教職員の皆さんご協力を宜しくお願いします。

写真は昨年学会賞を受賞した記念に撮影したもので、山口大学のWebページに掲載したものです。



第39回日本臨床分子形態学会 安澄記念賞受賞を記念して
(医心門の前にて)

定年に当たってー山口大学への感謝と期待ー



岡村 秀幸

学術研究部 部長

山口大学への採用

昭和41年3月に日々雇用職員として現山口市民会館の場所にあった事務局庶務課（現総務部）に採用された時は、机を置くスペースもなく先輩の机と机の間に椅子だけを置いて両隣から仕事を教えてもらいました。4月の正式採用後しばらくして石炭ストーブが片付けられ、空いた場所にやっと机を置くことができたような環境で山口大学での公務員生活がスタートしましたが、当時は仕事で何か疑問が出てくると直ぐに黒板の前に係員全員が集まって侃々諤々議論をし、解決していくというような家族的な雰囲気でした。ちょうど就職1年目に療養中の父が亡くなつたこともあり、公私ともにいろいろな方に大変お世話になりました。当時ご指導・お世話をいただいた諸先輩方はもちろん全員お辞めになっていますが今思い出しても感謝・感謝です。

昭和43年には事務局も吉田地区に移転し40年が経過しましたが、木々が大きく育ち緑に囲まれたキャ

ンパスとして整備も進み「共育できる大学」としての環境も整いつつあります。何年かして訪れたとき正門付近がどのようにになっているか楽しみです。

事務電算化のスタート

昭和52年4月から1年間ほど人事事務電算化の勉強のため、文部省人事課併任を経て、昭和54年に経理課に情報処理係が新設され本学の事務処理が機械化から電算化へと移行する初期段階から11年間にわたって人事・経理・入学者選抜等の電算業務に携わることが出来ました。各自1台のパソコンが整備されネットで結ばれている現在から比べると、事務電算化の一歩でしたが、ゼロからスタートした業務に関われ、非常に面白く、また、貴重な経験をさせていただいた11年間でした。

東アジア研究科の新設など

本学での人材系博士課程設置構想については、検討は比較的早い時期から始まりましたが、一時中断を経て平成9年から人文・教育・経済学部の先生方で新たな模索が開始され、平成12年に設置計画が確定し、新規概算要求段階での紆余曲折を経ながら、平成13年4月に独立研究科「東アジア研究科」として設置されることになりました。結果的には教育学系を除いたスタートとなりましたが、設置計画案作成過程での先生方の頑張りには、ただただ敬意を覚えました。

丸本学長の平成20年頭の挨拶では「共通教育の在り方を含めた学士課程教育の改善、全学的な学部再編」の必要性が述べられましたが、東アジア研究科・経済学部・観光政策学科・MOT専門職大学院の新設、医学系研究科・理工学研究科の再編・専攻新設などに見られた各先生方・事務職員の熱意があれば、学長のリーダーシップの下に学生を中心とした視点に立った検討が行われ、必ず山口大学の将来が開けるものと期待しています。

最後に

42年間の山口大学勤務の最後は学術研究部で仕事をさせていただきました。積み残したことは多々ありますが、三木学術研究担当副学長の下、非常に密度のある1年間でした。その中で、大学の最も大きな使命は「人材育成」であり、表裏一体の教育研究活動に裏打ちされた「人財」育成ということを改めて感じました。

国立大学は、これから20年度法人評価を経て第Ⅱ期中期目標・計画の策定など、各大学の特色を活かしどのように進んでいくかが問われる新たな段階にさしかかっています。

2020年を見据えた「明日の山口大学ビジョン」の実現に向けて着実な変革が重ねられることを期待し、山口大学の一層の発展と皆様のご健勝を心からお祈り申し上げます。

今日は何をしたか。



金子 孝志

経済学部 事務長

「今日は、何をしたか。」
「紙を折った。」
「そうか。」

「今日は、何をしたか。」
「紙を折った。」
「そうか。」

「今日は、何をしたか。」
「今日も、紙を折った。」
「そうか。」

寡黙な親父との夕食時の会話である。

42年前の3月、通学用自転車に学生服で大学本部（現在の山口市民会館所在地）に出勤した。学生部厚生課に配属され、初めての仕事は、学生健康保険組合への加入申込書を新入生に送付する作業であった。

数日後の夜7時頃、「金子君、どうした。大丈夫か？」

初めて（?）の酒に正体を失い、歓迎会場の廊下で大の字になっていた。

さらに数日後の午後4時頃、突

然、係長が「金子君、豆腐を買って来てくれたんか。」

職場はいつの間にか宴会場となっていた。

数ヶ月後の夕方5時前、先輩が「金子君、用務員室の風呂に入れや。」

先輩と「ダンス」に行く日だった。

御用始めの日、係長が「金子君、今日、飲みに付き合ってくれんか。」御用納めの日に行った飲み屋を5、6軒回った。係長が無くした書類を探すためだった。

現在地（吉田）に本部が移転して間のないある日の朝、本部屋上に見かけぬ旗が掲げている。「山口大学解放放送？」のアジ演説。学生による本部占拠・封鎖であった。

その日以降、「今から〇〇学部に行き、〇〇を排除する。」「〇〇団は本部玄関に集合せよ。」こんな日々が数ヶ月続いた。当時は若輩でもあったが、燃えていた。

給料日、正の字を数え集金に歩いた。買い置きインスタントラーメンの胴元はしばらく続いた。

「星の降る夜は……♪」。〇〇課アフター5のテーマソングは「星降る街角」。湯田の小料理屋でみんな調子よく歌い踊ったものだ。

「金子君、ちょっと。昨日はみんな何処に行っていたのかね。（ブツブツ）」課長席で最年長係員の私が怒られている。係長以上は

会議で、5時になっても帰って来ない。予定どおり〇〇会（平職員の飲み会）をした翌朝のこと。

「白樺♪青空♪南風♪……」晴天のグラウンドに美声（?）。開学記念レクリエーション行事教職員運動会の「借り物競走」で「歌を唄う」を引き当てた。何故か、カラオケも用意されていた。

振り返ってみて、思い出すのは若かった日のことばかりである。

みんなおおらかであった。そんな時代はもう来ないのだろうか。寡默だった親父ももういない。

「金子君、10年後の自分を見て、今を生きなさい。」とは、昔の上司が私に言った言葉である。今なら6年後かも知れない。

他愛のないエピソードばかりとなっていましたが、多くの方に支えられての42年間だったと、今、改めて実感しています。皆さんには大変お世話になりました。心から感謝しております。

山口大学の益々のご発展をお祈りしています。



医学部人事・職員係での旅行
(前列左から2人目が筆者)

退職者の雑感



かぶらき
鏑木 修
大学院理工学研究科
自然科学基盤系専攻 教授

私が山口大学に在職した期間はわずかに5年で、ほかの先生方のような山口大学での思い出話は特にありません。また第2の人生についても、それほど綿密な計画があるわけでもありませんので、自分自身の経験を振り返りつつ、後進や学生皆さんにいくつかのメッセージをお届けして第1の人生を締めくくりたいと思います。

研究について

研究者の卵として大学院の博士課程にいたころ、私は指導教官が提示したテーマを退けて、自分で選んだ問題に取り組みました。提示された問題は労力をかけさえすればほとんど自明な結果が得られるタイプのもので、その結果とは分野の大勢を支持するような受けのよいものでした。しかし、私はたとえわずかな進歩であっても、自分自身のアイディアに基づいて何らかの新しい視点を開くようなことがやりたかったのです。出来上がった論文は、指導教官の反対

があつて1年間難航しましたが、ほかの先生の仲介でなんとか博士の学位を取得できました。その間に母が病死したこともあって、つらい時代でした。

その後多くのテーマを取り組んできましたが、このときの姿勢は一貫して変わらない私の研究方針となりました。自分の流儀で考えを推し進めるだけでなく、それについてできるだけ多くの人たちの理解を得られるよう努力もしてきましたが、残念ながら大きな流れを作り出すまでには至らず、未だにマイノリティーに留まっています。しかし、後悔はありません。そこで、あえて言わせてもらいます。「マイノリティーになることを恐れずに、自分の信じる道に従え。」と。どんな世界でも、新しい道を切り拓いた人はすべて、当初はマイノリティーであったはずです。マイノリティーであることが改革者であるための十分条件でないのは当然のことですが、マイノリティーを経由せずに改革への道は踏み出せないので。明治維新の先導者たちを輩出した山口の地でこのようなことを言うのは、釈迦に説法かもしれません。

大学について

かつて東北大学に在職中のことでしたが、当時の理学部長で生物学科の小西和彦先生が、社会における大学の使命について「世の中のどのような変化に対しても対応できるよう、日頃から知的集団を

養つておくこと。」と言い切られたのを聞いて、その卓見に深い感動と共感を覚えたものです。古代中国の春秋・戦国史に登場する孟嘗君に代表される食客の時代を彷彿させ、一見時代錯誤ともとられかねませんが、実はずばりと核心を捉えています。単一スペクトルの集団は、環境の変化に対してもろいものです。現に成果を挙げているものを評価するのは当然としても、一方で、それ自身矛盾なく成り立つ考え方や主張であれば一定の礼をもって遇することの重要性、短期的視野では無駄だらけに見えても長期的にはきわめて効果的な方策がここから読み取れます。この理念に照らしてみれば、限られた判定基準に基づいた活動評価制度の徹底に伴う危険性は明らかです。個々の大学ばかりでなく日本の大学全体が、今後も社会において指導的な役割を果たし続けられるかどうかは、まさにこの精神を護り通せるかどうかに懸かっているのではないでしょうか。

最後に

一介のマイノリティーに5年間の活動の場を提供してくださった山口大学に心から感謝いたしますとともに、今後のますますのご発展をお祈りいたします。

長い間お世話になりました



佐々木 義明

大学院理工学研究科
環境共生系専攻 教授

これまでありがとう

1967年4月、林謙次郎先生（故人）のもとで助手として山大での生活が始まりました。当時の私は22才、それまでの人生のほぼ2倍、41年という時間の長さを知ることなどできませんでした。それがいつしか折り返し点を過ぎ、自分にもその日を迎えることができるとは…。これひとえに皆様方のおかげです。厚く御礼申し上げます。

不熟者の思い出

今後に熟す可能性を残している間は未熟者であるが、その可能性を失えば不熟者になると、昔、誰かの言葉にありました。不熟者が確定した私ですが、今日まで大人としてまがりなりにも歩んでこられたのは、林先生をはじめ教職員や学生の皆さんのおかげです。只々、感謝申し上げます。

投稿した後になって、論文の結論が誤りかもしれないと気付いたことがあります。何日間も追加の実験を集中的に行つた末、ある日

の徹夜実験でついに確信のもてる結論にたどり着きました。その時にみんなで食べた“出前一丁”的美味しかったこと、忘れ得ぬ味です。

ある時、卒業生のF君から手紙が届きました。鉱石中のヒ素とアンチモンの相互分離分析法を開発し、業界から表彰されたという内容でした。私（たち）は基礎研究に軸足を置いています。そこでの成果が実分析法に応用された事例の一つでした。

イタイイタイ病や水俣病が社会問題であった頃、山口県内のあちこちでも重金属汚染の疑いが生じていました。日本科学者会議山口支部は公害問題にも積極的に取り組んでおり、その一員として私も参加し、環境試料の化学分析を通して汚染状況の把握や汚染源の解明に努めました。山口県公害対策審議会等とは見解を異にすることが多かったけれど、これが私の地域社会における活動であったと思います。

元気をくれた仲間に乾杯

私はスキーをはじめいろいろなスポーツで多くの教職員・学生にお付き合いいただき、とても楽しい時間を持ち続けることができました。いい汗をかき、心身共にリフレッシュできました。お付き合い下さいました皆さんに乾杯！

また、教職員組合の場でも多くの仲間と出会い、仲間に助けられながら過ごしてきました。おかげで、精神的にも肉体的にも元気に？この日を迎えることができたと思っています。元気をくれた仲間に乾杯！

これからもよろしく

第2の人生のスタート台に立つ今、何の設計図も持たず、その長さもゴール地点も知ることができずにいます。けれども、周りの人たちのお世話になりながら、それに感謝しながら、自然体で生きていこうと思います。

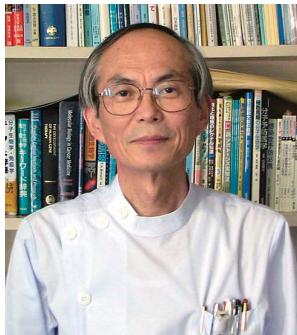
これまでありがとうございました。これからもよろしくお願い申し上げます。



1994年恐羅漢スキー場にて



私のショートストーリー



内藤 克輔

大学院医学系研究科
情報解析医学系専攻 教授

小学生の頃

春から夏にかけて、道路際の小川にはトンボの幼虫（やご）が次から次へと水際の草に上り、孵化します。しかし、トンボが孵化する際に、羽に手を触れると、その触れた羽の部位のみの成長が止まり、羽が延びずに変形し、トンボは飛ぶことができなくなることを何回も経験しました。蝉の羽も、トンボと同じように成長が止まります。蝶々も同じでした。

高校から医学部へ

高校に進学してから、母が看護師だったこともあり、また小さい頃の昆虫での体験から、生物界の最高峰にいる人間の勉強をしたいと思い金沢大学医学部に進学しました。大学卒業後、癌治療に繋がる仕事をしたくて、内科的治療も外科的治療も行う泌尿器科を選択し、当時の泌尿器科講座久住治男助教授（後に教授）の下で、臨床修練の傍ら、癌細胞が周囲の纖維素を溶解する現象の研究で学位を

取得しました。さらに、自らが率先して樹立し、保有していた可移植性膀胱癌や腎細胞癌株などを用いて、抗癌化学療法の基礎的研究（薬剤感受性、細胞動態）も行いました。

留学

1981年から82年にかけて、スウェーデンのKarolinska研究所に家族と共に留学する機会を与えられました。ここでは、念願の温熱が癌細胞のDNA合成に与える影響を研究しました。1年間の留学を終え、帰国準備をしている時に、ボスが宿舎まで来てくださり、何故帰国する、もう1年間研究を続け、学位を取るようにと強く勧められましたが、日本での約束（1年間の留学）を守るために帰国していました。今から考えると、もう1年間勉強し、Karolinska研究所の学位も取得しておけば良かったのにと反省しています。

山口大学へ

平成3年10月に山口大学医学部泌尿器科学講座の教授として赴任しました。多くの先生方のご指導、ご協力を頂きながら、教室員には臨床および基礎研究を勧め、癌治療におけるサイトカインの作用機序の究明および得られた結果に基づいた治療法の改善、さらに各種尿路癌の遺伝子解析等を積極的に進め、それら癌の発生、その後の経過や治療成績との関連についての研究などで成果を挙げることが

できました。

また、スウェーデンのKarolinska研究所には教室員5人を留学させ、それぞれの留学生は、Peter Ekman教授とは前立腺癌の、Kari Hemminki教授とは膀胱癌の遺伝子変化等を検討し、Gustav Groth教授にはヨーロッパにおける臓器移植、特に腎臓移植における脳死での臓器摘出の実際等を体験させていただきました。また、アメリカのNIH（国立衛生研究所）およびアイオワ大学にもそれぞれポスト・ドクを派遣し、癌の発育、進展や造精能に関する研究での指導を受け、大きな成果をあげることができました。

学生の教育では電子シラバスの構築に関わることができ、また平成10年には、厚生省、文部省主催による富士教育研修所で開催された第25回医学教育者のためのワークショップに参加する機会が与えられました。日本泌尿器科学会では理事として、国際委員会委員長として、各国を駆けめぐり、日本泌尿器科学会に対する評価の向上に努めることができました。

最後に終始支援して下さった山口大学全てのみなさまに、篤く御礼申し上げます。

常盤台で過ごした日々



西田 晶子

大学院医学系研究科
応用分子生命科学系専攻 助教

有機合成化学との出会い

私が工学部工業化学科に教務員として採用されたのは1969年5月のことでした。当時学生運動が活発で教授会では学生との交渉などで職員人事どころではなく、1ヶ月遅れの採用となつたようです。私としては大学を卒業しても職はなく2年間臨時教員をしていたところで、気力と体力だけは満ちていきました。所属は有機合成化学講座（現梶返昭二名誉教授）で、以来38年余の付き合いとなりました。

ちょうどこの頃有機化学界に新しい理論（フロンティア軌道法など）が提唱され、それまでの古典的有機化学から脱皮し始めた時でした。加えて分析機器の目覚ましい進化の恩恵で研究のスピードは急速に増しました。長い工程の後、目指す化合物が合成出来た時、研究室で学生さんたちと祝杯をあげたこともあります。今日まで勤められたのは研究室で共に過ごした多くの学生さんたちと根気強く見守って下さった先生方のおかげ

です。合成そのものは泥臭くて、地味な仕事ですが、その理論は鮮やかで感動します。最近、化学触媒のみならず究極の触媒＝酵素にも携わることになり、こちらも益々面白くなってきたところです。

それぞれの居場所

2007年秋、工学部主催の3回目の未来科学講演会企画の機会が与えられ、念願だった理化学研究所の袖岡幹子先生をお迎えすることができ大きな喜びとなりました。もちろん多くの方のご協力で出来たことですが、ひたすら裏方で過ごした者がこのような機会が持てたことは最近の工学部の変化かもしれません。しかし、これとてその時の上に立つ方の為せることです。

現在山口大学には1万3千人以上の人々が学び、教え、働き、そして研究しています。このような大集団ともなれば実にさまざまの人々がおられますし、それはまた当然のことです。いろいろな人がいてそれぞれの人が持てる力を發揮してこそ発展があるわけです。どうしても相性の悪い人、気が合わない人もいるでしょう。

そんな時感情をむき出しにした対応から何が生まれるでしょうか。中島みゆきが吉田拓郎に贈った歌に「出会わなければよかった人などないと笑ってくれ」という一節があります。落ち込んだ時この言葉を私なりに解釈して、自らを励ましてきました。人は人として互いに尊重し合うことが何より大切だと感じています。山口大学は多くの人々で成り立っているわけで、全ての人が心置きなく活躍できる場に居ることが出発点だと思います。

これから

澄んだ青からくすみ始めた青までの長い青春時代を常盤キャンパスで過ごすことができ、未熟だった私を何とかここまで成長させていただきました。ひとえに多くの皆様のおかげと心より感謝いたします。今後のことは未だ考えていませんが、これから青色に淡いピンクも加えてこれまで出来ずにいた好きなこともしていきたいと思っています。

山口大学とそこに暮しておられる皆様が良い方向に進まれますことをお祈りいたします。



2007年11月袖岡先生と記念撮影、研究室にて（左から2番目が筆者）

農学部を去るにあたって



早川 誠而

農学部
附属農場長
生物資源環境科学科 教授

私は、昭和63年2月に山口大学農学部に赴任いたしました。赴任時、車で移動いたしましたが、激しい豪雪にあい、苦労したことを覚えています。その2、3日後に研究室の皆さんで歓迎会を開いていただきました。その夜も雪で、湯田温泉の通りで撮った写真の顔に雪がちらついて写っていたのを今でも鮮明に覚えております。雪の山口を実感いたしました。ところが最近は、積雪を見ることが少なくなりました。温暖化の影響でしょうか。

山口に赴任して20年経ちますが、約4年ごとに改組が行われ、そのたびに学科や講座の名称変更が行われ、激動の中にいるのを感じていましたが、3年前に大学が法人化されて、さらに状況が厳しくなってきた感があります。この度無事に退官を迎えることが出来ましたのも、皆様方のご支援のお陰と深く感謝申し上げます。

私の専門は気象学で、山口にはその専門家が少なく、希少価値があったのでしょうか、いろいろと外での活動も多くなって、皆様方にはご迷惑を掛けしたことを申し訳なく思っています。私は気象災害、特に豪雨災害の研究を行っていました。平成6年に「地域環境計測と防災予知・予測システム」ということで、大学に気象用レーダを導入していただいたことが一番の嬉しい思い出となっています。ただし、ビーム幅などの性能（分解能）が私自身が考えていたもの

に比べ、思ったほどよいものでなかったために、十分な活用がなされなかつたことを残念に思っています。

山口大学は少人数の教員で教育・研究を行っていますので、各種委員等の順番が早く回ってくることが多い反面、多くの他学部の先生や職員方および地域の方々との交流の機会が増え、いろいろ勉強をすることができ、私にとっては大きなプラスとなっています。この5年間私は、「研究よりは教育に専念している」と言ってまいりました。お陰で、多くの方々の支援を得て、貴州省の人材育成事業に携わることができました。今も環境教育に関する研修受け入れや、環境教育の教材作成に関して日々頑張っております。

私自身、大学において教育・研究に携わり、いくつかの成果を得ることができましたが、これらの成果は学生・院生によるところが大きいと考えています。学生にはいつも“Never Give Up”との考え方で指導してきましたが、学生もそれに応え、外部から大きな大学に比べ遜色がない評価を得ることができ本当に感謝しています。

退職後もいろいろと山口大学にはお世話になることと存じますが、本学および教職員方々が一層の発展をされるよう心から願っております。

人生最高の貴重な6年間でした



山根 和明

経済学部

経営学科 准教授

非常勤を含めると6年間の在籍でしたが、本当に楽しいものでした。ほとんど毎日、大学には自転車で通っていましたがその間50分、いつも「今日はどう教えようか」、「何を話そうか」と思い巡らせ一度も退屈だったことはありません。

授業は“昔取った杵柄”でいつも英語の歌を私のギターで学生諸君と声高らかに歌うことから始めました。こうすることで学生諸君と心の距離がどんどん縮まることを実感できる自分は幸せでした。そして、ペア会話（授業の初めの10分に全員をペアにして自由会話をする方法。ペアにならない3人は私と会話します。）へ移ると、皆待ってましたとばかりに飛び切りの笑顔で積極的に会話するのです。皆本当にいい顔しているのです。それを見ていると楽しくなります。こうして、全員の気持ちが一つになったところでTOEIC対策の授業に入るわけですが、学生諸君が私を認めてくれているのでスムーズに乗って授業ができるわけです。

私はこのスタイルをこの6年間貫きました。共通教育の「TOEIC準備、指導」の授業でもです。他の先生方とは正味の授業時間が30分くらい違うわけですが、それでも見劣りする結果にはなっていないと思います。それよりも何よりも、長い目で見て「英語学習は楽しい、もっとやって見たいな！」という気持ちを多くの学生諸君の胸の内に芽生えさせたはずだというのが、私の自負です。

6年前まで、30数年間、英語を中心とした大きな進学塾を経営していましたが、経済学部長の瀧口治教授（現副学長）にお声をかけていただき、非常勤として英語の基礎、TOEICを指導するために母校、経済学部に参りました。英語は語学留学した以外は独学ですが、長年大学入試問題・センター試験問題などを徹底的に研究してきたので大学で教えることへの不安はありませんでした。その上、私自身、受験英語指導だけでは飽き足らず、実践英語指導をしたいと思っておりましたので、即！快諾したわけです。

3年後に助教授にさせていただきましてからは、瀧口教授の計らいで「君はとにかくTOEICだけをやってくれ、そして実績を出してくれ。」と伸び伸び働けるようにさせていただいて、それからはTOEIC研究、指導に没頭できました。明けてもTOEIC、暮れてもTOEICです。自転車での行き帰り（もっとも、帰りはフジグラ

ンまでで、そこで妻がバンで待つており自転車を積んで帰る。というスタイルでしたが。。。）年がら年中TOEICのテープを聴いて練習するという日常でした。

最後の2年間も現藤井学部長に同様の暖かい計らいをいただき、その上ベストティーチャー賞へも推举をいただき、自身も最終的には990点満点が取れ、結果として学生たちにも自信をもって教えられる技術も身につき、最高の気分で山大生活締めくくることができ本当に感謝しております。

今後は大阪の方の私に勤務することになっておりますが、毎週金曜日には非常勤として経済学部へと戻って参りますので教職員の皆様、学生諸君とはお別れするという感覚はありません。今後とも、わが母校の為、特に経済学部発展のため、生涯貢献していくこう思っております。

本当にありがとうございました。

University College London(ロンドン大学)と 大学間学術交流協定を締結

宮崎 充保
教授 大学教育機構国際センター長

11月19日（月）、山口大学とUniversity College London (UCL：ロンドン大学) は数年の部局間交流実績を踏まえ、今後の交流・発展を推進するため、大学間学術交流協定を締結しました。UCLからはMarco Federighi工学部副学部長とAnna Clarkビジネス対外部長が出席され、山口大学において大学間学術交流協定調印式を執り行いました。

山口大学とUCLは平成19年1月に、工学部間、大学教育機構と語学センター間で部局間学術交流協定を締結しました。この2部局間での交流の充実と両大学からのさらなる交流企画の提示などにより、より広範で活発な交流活動の実現を求めて、このたび部局間協定から大学間協定に移行することになりました。

今回締結した大学間学術交流協定では、人的交流や共同研究の促進のほか、「長州五傑記念講義」の開催についても触れられています。「長州ファイブ」が若き日に留学生活をおくり山口と歴史的に縁の深いUCLと学術交流協定を締結して、密接な関係をつくることで、教育・研究において魅力的なプログラムを展開していきたいと考えています。

約150年前に、東洋の若者「長州ファイブ」を迎えたことからうかがえるように、UCLは人種・性別・宗教の壁を超えて高等教育を等しく行うことを創立の精神として掲げており、「国際化」の先達としてその精神を見習っていきたいと思います。山口大学はUCLと協働して時代の先駆けとなることと確信しています。



協定書にサインする丸本学長



握手を交わすFederighi工学部副学部長(左)と丸本学長(右)

イングランドオークの記念植樹

同日、この大学間学術交流協定締結を記念して、英國大使館グレアム・フライ大使より寄贈されたイングランドオーク（桺の木）の植樹式を、Federighi工学部副学部長、池本山口日英協会会长、安田山口県国際交流協会専務理事をはじめとした来賓および大学関係者等約30人が出席し開催しました。この苗木は、1975年5月、英國女王陛下エリザベスII世により植樹されたもので、その子孫として大使館内に派生したものをお贈りいただいたものです。

丸本学長の挨拶に続き、植樹・土入れをFederighi工学部副学部長、池本山口日英協会会长、安田山口県国際交流協会専務理事、丸本学長が行いました。

オークの成長と共に、両大学および日英両国の交流が深まることを願っています。



山口大学・UCL・山口県の関係者による記念撮影



土入れをする丸本学長

University College London (UCL)…

1826年に創立されたロンドン大学初のカレッジ。UCLは、教員スタッフ数・学生数が21,800人にも及ぶ英国最大規模の大学であり、卒業生・教員から20人のノーベル賞受賞者を輩出しています。また、日本との係わりも深く、日本から初めての留学生が「長洲ファイブ」でした。なお、TIMESなどによるランキングでは毎年、英国ではトップ5、世界ではトップ30内にランクインしています。

学内連絡先
TEL : 083-933-5980
E-mail : direc_ic@yamaguchi-u.ac.jp

第4回イノベーションとマネジメントに関する国際会議および国連大学新技術研究所（オランダ）・武漢理工大学（中華人民共和国）との協力協定調印式

上西 研

研究科長・教授 大学院技術経営研究科



オープニングセレモニー

国際会議の概要

近年、技術と経営に関するイノベーションの重要性がますます高まり、あらゆる分野の国際競争力は革新的技術の創出と活用、先進的な経営基盤の上に成り立っています。このような背景のもとで、2004年以降、イノベーションとそのマネジメントに関心の高い山口大学、オランダ・ UNU-MERIT（国連大学新技術研究所）と中国・武漢理工大学が中心になってイノベーションとマネジメントに関する国際会議を開催してきました。今回、第4回目の会議を山口大学大学院技術経営研究科が主催し、2007年12月5、6日に全日空ホテル宇部（山口県宇部市）で開催しました。会議には、20カ国から150人を超える研究者が参加し、79件の研究発表と活発な討論が行われました。オープニングセレモニーでは、宇部市藤田市長、文科省高等教育局専門教育課の君塚剛氏よりご挨拶を頂き、また、主催元として本学丸本学長より歓迎のご挨拶を頂きました。

国際会議の主要テーマ

今回の会議の主要テーマを以下に示します。

1. ホットイシュー：産学連携、MOT (Management of Technology : 技術経営) 教育、プロジェクトマネジメント、デジタル・エンジニアリング
2. 科学技術政策、技術の経済学的分析
3. 技術、製造、製品開発、サービスにおけるイノベーション
4. 企業経営、会計・財務管理、マーケティング、ロジスティクス&サプライ・チェーン・マネジメントおよび人的資源管理におけるイノベーション
5. 知的財産およびナレッジ・マネジメント
6. 電子商取引、電子政府、情報通信技術 (ICT) マネジメント

イノベーション創出に大きな役割を担っている产学連携やMOT教育をホットイシューとして取り上げた点が大きな特徴であり、これらの分野の世界的な研究者・実践者が山口県に一同に集って議論できたことは、この地域のイノベーションの推進のために非常に有意義であったと思われます。また、並列して開催した「MOT教育国際認証ワークショップ」においては、山口大学大学院技術経営研究科が実践しているMOT教育を事例として、世界レベルでのMOT教育の質の保証について議論を交わしました。グローバルに活躍できる人材を継続的に育成していくために、ここでの議論を教育の現場に活かすための取組に反映させています。

国連大学新技術研究所（オランダ）・武漢理工大学（中華人民共和国）との協力協定調印式

本会議に先立ち、12月4日には、イノベーションと技術経営に関する教育・研究の相互的発展を目指し、共同教育研究機関の設立、共同研究プロジェクトの推進、継続的な国際会議の開催など、3大学の協力協定を約束する調印式が山口大学本部特別小会



バンケット

議室で行われました。国連大学新技術研究所はオープンイノベーションの世界的な研究拠点であり、この調印をきっかけとして、特にオープンイノベーションに関する共同研究をさらに展開していきたいと考えています。また、武漢理工大学とは中国でエクゼクティブ向けのMOT大学院を共同で設置するなどの具体的な計画を着実に実行して行きたいと思っています。



握手を交わすヒールト教授（左）、筆者（中央）、フー学院長（右）



記念撮影
(左から江教授、宮崎国際センター長、筆者、ヒールト教授、丸本学長、フー学院長、シェ教授、塚原教育国際担当副学長)

学内連絡先 TEL : 0836-85-9060 E-mail : kaminisi@yamaguchi-u.ac.jp
--

職業会計人コース

－経済学部から公認会計士試験の現役合格者が誕生－

さとし
山下 訓

准教授 経済学部 経営学科



経済学部3・4年生3人が現役で公認会計士試験合格

2007年11月19日（月）、金融庁の公認会計士・監査審査会から本年度公認会計士試験（※）の発表があり、経済学部経営学科職業会計人コース1期生井上誠君と沖田俊裕君（4年）、2期生大西孝宜君（3年）の3人が合格しました。

昨年6月に発表された公認会計士試験短答式では、2回目受験である4年生2人と初受験の3年生1人が合格しました。昨年度の短答式合格者3人とともに6人が、8月に実施された論文式試験に挑戦し、4年の井上誠君と沖田俊裕君、3年の大西孝宜君が合格しました。

なお、職業会計人コースの立ち上げ時に3年生でモニターライ生だった貞時亜衣さんも本年度合格しました。

(※)公認会計士試験は短答式と論文式からなり、短答式合格者および免除者が論文式試験を受験可能。短答式試験は財務会計論、管理会計論、監査論、企業法の4科目について行い、論文式試験は会計学、監査論、企業法、租税法、選択科目（経営学、経済学、民法、統計学）の5科目について行う。公認会計士・監査審査会の合格者調によると、本年度の出願者は20,926人で、合格者4,041人、大学在学中の合格者は434人だった。

学部長表彰

11月28日（水）、これを受け藤井経済学部長からSumma賞の表彰状と楯、鳳陽会（経済学部同窓会）から副賞が贈られました。表彰式の後、丸本学長に合格の報告を行い、学長からお祝いと将来に期待したい旨の激励がありました。



Summa賞授与式後の記念撮影
(左から筆者、大西さん、井上さん、藤井経済学部長、沖田さん)



丸本学長（前列右から2番目）と瀧口副学長（後列中央）記念撮影

学部生から税理士科目合格者

12月14日（金）、国税庁から税理士試験の結果が発表されました。残念ながら在学中の税理士合格者はいませんでしたが、国税庁の発表によると全国で

も大学在学中の合格者はいませんでした。しかし、簿記論と財務諸表論の2科目に4年生の加島雅一君、3年生の豊村力哉君と松本恵美さんの3人が合格し、1科目に3年生の中村しづかさんら2人が合格しました。不合格はABCDの4ランクに分けられますが、ほぼ全員Aランク不合格という大変惜しい結果で、今後の健闘が期待されます。

また、職業会計人コース設立時にモニターランクであつた大学院生の古屋賢明君が2科目、岡村琴美さんが1科目合格しました。



経済学部長室にて記念撮影

職業会計人コース

2004年度に経営学科の中に設置され、2008年3月に第1期生が卒業します。この職業会計人コースは公認会計士や税理士など会計の資格取得を目指すものです。各学年定員30人で、1年次に選抜します。コース内には会計専攻と税務専攻があり、それぞれ公認会計士と税理士を学部在学中の4年間で合格することを目標にしています。

山口は勉強に最適な小都市ですが、大学外での資格試験勉強などの機会にはあまり恵まれておらず、それを補うことも目的としています。それも単に大学内では会計専門学校の勉強ができるようにするだけでなく、会計事務所のパートナー（幹部）クラスの公認会計士等を教員に迎え、資格試験に近い一部の科目も卒業単位に認められます。

さらに、正規の授業の範囲外ですが、受験対策講座も大学で受けられます。また、自習室を設置しており、このような仕組みは国立大学法人では初めてです。



自習室

長期休暇中も勉強して3年生夏の合格もしくは一部合格を目指します。3年生後半からは再度受験するため、上級コース等を設定しています。資格取得を目指す効率的な勉強と、必ずしも解答があるわけではないことを学ぶという大学での勉強との両方を追求したいと思います。



合格者による勉強法報告会



刺激し合いながらの勉強

学内連絡先
TEL : 083-933-5518 or 5586
E-mail : yamasita@yamaguchi-u.ac.jp

SD研修

山口大学では、(財)山口大学教育研究後援財団からの助成等により、SD研修（スタッフ・ディベロップメント）を実施しています。

これは、職員を海外に派遣することにより、派遣先の管理運営方法および教育研究体制に直接触れたり、大学運営の現状や課題を把握できる視野を身につけたりすることによって、業務の改善につなげることを目的としています。

職員から希望者を募り、海外派遣に対して目的意識のある職員を毎年2人程度選考・派遣しています。

平成19年度は、本学の学術交流協定校でもあるオクラホマ大学（アメリカ）とニューカッスル大学（オーストラリア）に各1人を派遣しました。

海外派遣SD研修に参加して ～In University of Oklahoma～

中村 優介

情報環境部 情報企画課 情報企画係

私は山口大学海外派遣SD研修に参加する機会を与えていただき、1月21日から1月28日までの8日間、オクラホマ大学（アメリカ合衆国オクラホマ州）に行って参りました。研修先のオクラホマ大学は、創立が1892年、学生数は約3万人（本学の約3倍）の伝統ある総合大学で、アメフト、バスケットなどのスポーツがとても盛んです。また、オ克拉ホマ大学は通称「OU」と呼ばれ、デパートなどにOU専門のグッズ売り場があるほど地域の人々に愛されていました。



大学の主要図書館 Bizzell Memorial Library

私は現在情報環境部情報企画係で、教職員用ICカードの発行業務やメディア基盤センターを事務的に支援するという形で情報基盤整備などに携わっております。そのため、今回の研修では、海外の大学の状



オクラホマ大学内にある大学グッズ売り場
(衣類・文具・ゴルフ用品などさまざまな商品がありました。)

況や課題などを参考にし、自分の携わっている業務を見つめ直す目的で参加させていただきました。

オ克拉ホマ大学のIDカードは、学生用、教職員用ともに1つの場所で発行されており、「Sooner One Card」と呼ばれています。この「One Card」という言葉は、そのカードを持っていれば全てのことができる（これ以外にカードを持つ必要がない）ことを表しており、この考え方はとても基本的で重要であると感じました。その一例として、「Sooner One Card」には本学のカードにはない課金機能を持っており、キャンパス内にある食堂・ブックストア・自動販売機などで商品を購入することができます。

これに対して本学の学生は、「学生証」「プリンター



IDカード(Sooner One Card)に課金をする機械(VTS)と
カードが利用できる自動販売機

専用カード」「コピーカード」「生協カード」などさまざまなカードを所持しており、事実私も学生時代に煩雑な思いをしておりました。まずはこれらのカードの機能を1つのカードに集約し、「山大One Card」にしなければならないと思いました。また、現在本学では、学生用IDカードと教職員IDの統一(ICカード化)が検討されているため、オクラホマ大学のIDカードの発行および利用方法はとても参考になりました。

情報基盤については、オ克拉ホマ大学においても本学と同様にキャンパスが複数あるため、遠隔講義システムやTV会議システムが充実しており、特にTV会議システムは専用の会議室が30部屋もあるとのことでした。本学においても、会議や講義のために、教職員や学生がキャンパス間を移動しているという現状があり、これらのシステムの重要性を再認識することができました。

また、図書館サービスを担当しておられる方にもインタビューをする機会があり、とても印象深かったのは、「学生の満足を第一に考えたサービスを提供する。」ということでした。事実この図書館では、学生を対象としたサービスの満足度アンケートで3年連続1位に輝いているとのことでした。私も普段の業務で「学生の満足を第一に考えたサービスを提供する。」ことを念頭に入れ、より良いサービスを提供できるように努力していきたいと思います。



IT Business Strategyの担当者と筆者(右)



Infrastructureの担当者と筆者(左)

今回の研修では、海外の大学における経験だけでなく、日本とは異なる文化に直にふれることができ、とても良い経験をさせていただきました。最後になりましたが、国際課並びに情報環境部の皆様にはさまざまご支援をいただき本当にありがとうございました。

学内連絡先

TEL : 083-933-5175

E-mail : yuske.n@yamaguchi-u.ac.jp

SD研修を終えて -Newcastle

藤岡 千尋

情報環境部 情報化推進課 情報推進係

1月28日～2月4日の8日間、オーストラリアNSW州のニューカッスル大学を訪問し、研修を受けてきました。研修内容は、キャンパス見学・図書館見学・情報関連のインタビューを行いました。



Vice-chancellor・Corporate Information directorと
(中央が筆者)

まず、大学を訪れての第一印象は、キャンパスの規模が大きい。児童施設やスポーツセンターもあり、施設が充実しているということ。施設は一般市民にも開放されていて多くの市民で賑わい、大学が地域と一体化しているようなあったかい印象を受けました。山口大学も、こういった地域との関わりを持ったアットホームな大学にしていきたいと思いました。

また、キャンパスはたくさんの木々に囲まれ、緑がとても美しいキャンパスでした。このキャンパスの美を守るため清掃チームが清掃作業を行っていました。この清掃チームは、障害者で構成されているそうです。ニューカッスル大学では、障害者雇用を積極的に行っていて、清掃チームのようにグループ（障害者+指導者）で活動をしているそうです。私の所属している大学情報機構でも、障害者雇用の取組が行われています。雇用の形はさまざまですが、



SPORTS & AQUATIC CENTER

誰もが働きやすい職場環境作りをしていくことは非常に重要なことだと改めて実感しました。

次に、大学図書館の訪問をしました。私が大学を訪れた時期は夏休み中でしたが、それにも関わらず、図書館2F Information Common（情報ラウンジ）はほぼ満席で、とても活気がありました。このInformation Commonには120台のPCが設置されています。グループで学習ができるように机の配置が考えられていて、椅子はPCの台数よりも多く置かれていました。

また、Information Commonでの飲食・携帯使用が認められており、カフェや自動販売機も併設されていて、多くの学生・スタッフが利用していました。このカフェの売上げは、図書館運営費用にかなり貢献しているそうです。Information Commonは、24時間いつでも利用可能で、学生の情報交換の場としてとても好評で、設立してから約3年間、一度も利用者が途切れたことがないそうです。図書館は静かに学習する場ではありますが、Information Commonのように、みんなで話し合いながら学習する場の必要性を感じました。



Information Common

また、情報分野のインタビューでは、組織体制の効率の良さを感じました。IT関連全てのトラブル・要望を受け入れる部署があり、そこを窓口として、簡単な問題はその場で解決、専門的な問題はそれぞれの担当に振り分けるといった業務を行っていました。ここでは、ジェネラリストとスペシャリストの分業がちゃんと行われており、効率的に仕事ができているように感じました。また、トラブルが起きた時の連絡先が明確になっているので、学生・スタッフにもとても分かりやすいです。情報分野に限らず、例えば、学生支援をする部署にもこういった窓口があれば、学生の生活支援が向上するのではないかと考えます。



図書館内カフェ

山口大学のように約3年ごとにいろいろな分野の業務を経験して見識を広げるジェネラリストの育成はとても重要なことで、私自身魅力を感じていますが、専門的な分野でのスペシャリストの育成も状況に応じて必要になってくるのではないかと思いました。

この研修で、海外の大学のいろいろな様子を知ることができ、大変有意義な時間を過ごすことができました。それと同時に、自分の語学力の乏しさも痛感しました。これを機に、海外の大学で学んだことを業務に活かしつつ、語学の勉強に励みグローバルな職員を目指して頑張りたいと思います。



情報スタッフ

学内連絡先
TEL : 083-933-5106
E-mail : fujioka@yamaguchi-u.ac.jp

山口大学人文学部 異文化交流研究施設 第16回講演会 「私の農村・大学・留学生活と学問の道 —中日交流の考古学を志して—」の講演を聴いて

長村 真吾

大学院人文科学研究科 地域文化専攻 歴史文化論分野 2年



2007年10月15日（月）、山口大学大学会館にて、王維坤氏（中国・西北大学教授）による講演会「私の農村・大学・留学生活と学問の道——中日交流の考古学を志して——」が開かれました。王先生は昨年4月から1年間国際日本文化研究センターに客員教授として招聘され、古代文物の日中交流史の共同研究を主催しておられます。

王維坤先生と諸先生方との「出会い」

王先生は、中国や日本で多くの先生との「出会い」を経験しておられます。まず、王先生は、西北大学の陳直先生や張豈之先生との出会いにより、考古学への道を歩むことになりました。そして、日本においては、日中の比較考古学の他にも、奈良教育大学の三辻利一先生との共同研究により、科学的に考古遺物を分析するという、新たな角度から考古学にア

プローチする手段を得ることができました。まさに、王先生にとって諸先生方との「出会い」はチャンスであったと思います。

王先生と井真成の墓誌銘との「出会い」

「出会い」とは人だけではなく、物との出会いも重要ではないかと思います。今回の講演会では、井真成の墓誌銘のお話もありました。井真成とは遣唐使で唐に留学した人物です。彼に関する記録は、日中両国の文献史料にも一切ありませんでしたが、この墓誌銘の発見により、そこに書かれている銘文の内容や文字の配列によって、当時の日中交流の様子が浮かび上がってきました。私は、考古学とは物との「出会い」の場でもあると感じました。

「出会い」とチャンス

今回の講演を聴いて、私は「出会い」とは、人だけではないのだと痛感しました。国際交流と言うと、私は外国に出かけ、その人たちと触れ合うことをイメージしていました。しかし「出会い」とは、何も人だけではなく、資料との「出会い」や本との「出会い」など、様々な出会いがあり、その出会いがきっかけで、新しい角度から物事を見ることができるようになると思いました。まさに「出会い」とは自分の視野を広げるチャンスではないでしょうか。



人の出会いを語る王維坤先生



挨拶する添田建治郎人文学部長

学内連絡先
人文学部馬研究室
TEL : 083-933-5226
E-mail : biaoma@yamaguchi-u.ac.jp

山陽病院クリスマス会に参加して

村山 久和
医学部 保健学科 3年

きっかけ

昨年の12月18日（火）、私たちは宇部市東岐波の国立病院機構・山陽病院のクリスマス会に参加させていただきました。メンバーは、2学部からそれぞれ工学部感性デザイン科から矢倉由果里（2年生）、医学部保健学科から中園愛子（4年生）、梅本まりや（3年生）、グレン・アイタ（3年生）、池田友美（3年生）、そして私の6人でした。



メンバー（左から筆者、梅本、中園、アイタ、池田、矢倉）

私たちは、それぞれ音楽に興味があり、もし機会があれば病院で何かレクリエーションを通して患者さんと交流を持ちたいと考えていました。ちょうど昨年、実習やアルバイトでお世話になった山陽病院で、入院患者さんたちのマジックショーのことや、緩和ケア病棟で行われるミニコンサートなどの取り組みについてのお話を伺いました。

その時伺った話とは、当時新聞記事にもなったことで、ある患者さんが人生最後のひとときを大好きな手品を通して多くの患者さんやお客様と交流を持たれたというものでした。当時、その患者さんの状態は既に相当悪く、車椅子で過ごすことも難しく、ベッド上で過ごすことにも大きな苦痛があったそうです。1時間近くのマジックショーにはとても参加できる状態ではありませんでしたが、酸素ボンベか

らの酸素吸入を受けながら、マジックショーを見終えることができました。そして、それから数日後、その患者さんは亡くなられました。

このことを聞いて私は、病院では治療に伴う辛さや不安、悩みばかりではなく、病気や障害を抱えながらでも、患者さんが自己実現できる時間を創り上げることが可能なことを知りました。例え回復が望めない厳しい段階にあっても、患者さんは残された最後の一瞬を生き生きと輝いて過ごすことができるのだと思います。

山陽病院への提案

実習でお世話になった緩和ケア病棟でも家庭的なリビングがあり、そこで季節ごとの催しがボランティアグループによって行われています。私たちは当初この場所で何か患者さんと小さなレクリエーションができればと考えました。

実習が終わって数ヶ月して、山陽病院でアルバイトの機会をいただき、緩和ケア病棟以外の様子を知ることができました。重い障害を抱えている小さな子どもたちから、長期入院している高齢の患者さんなど多くの患者さんことを知りました。

私たちは、病院のみなさんにクリスマス会のことをお話しをさせていただいたところ、快く受け入れてくださいました。当初、緩和ケア病棟内にある小さなソファーで数人の患者さんたちと一緒に歌を歌うことを考えていましたが、病院の方のご好意で大きな玄関ホールでクリスマス会を行うことになりました。

本番当日まで

それから私たちは練習や話し合いを重ねていきました。クリスマス会ということで、賛美歌の中からクリスマスソングを中心に考えました。しかし、あまり賛美歌ばかりでは、プログラムが単調になるの

と、あまり多くの人たちに知られていないこともあります。その後内容を変更して、昔懐かしい童謡やフォークソングから何曲か選びました。内容は、「ジングルベル」に始まり、クリスマスマッセージとして詩の朗読をして、途中に「ふるさと」、「翼をください」等のおなじみの曲を入れて、最後は「きよしこのよる」というプログラムにしました。

また、ギターやキーボードなどの楽器を使うので、音の問題があり練習場の心配がありました。幸いなことに練習場も見つかりました。その他には、なかなかメンバー全員が集まるのが難しいこともありました。なんとかそれぞれの予定を調整しながら何人かでも集まり、時には夜遅くまで練習することもありました。メンバーは、お互いキャンパスが離れているので、どちらかが移動しなければいけないという部分がありましたが、今振り返ると、違う学部同士で協力しながら何かひとつことを一緒に創り上げていく喜びの方が多かったような気がします。

私は、サラリーマン時代はよくカラオケに行く機会が多く、歌うことが大好きでした。そして、自分でも案外歌える方だとずっと思い込んでいましたが、練習中、結構音程を外してしまうところが多いことに気付かされました。こんな私なので練習を重ねつつも、うまく歌えない箇所や、ギターがうまく弾けないが出てきたりして、どうしようかと悩んだこともありましたが、メンバーのみんなに励まされながら練習を続けることができました。

私たちはコンサート当日まで、病院の方と連絡をとりながらプログラムの細かなところを詰めていきました。そして、大学の先生方や事務の方からもアドバイスや支援をいただきながら、準備を進めることができました。

いよいよ本番

本番当日は、入院している子どもたち、一般の入院患者さんが介護士さんや看護師さん、家族に付き添われて会場に来てくださいました。そして、一般のお客さんも多数来場してくださいました。会場の多くの人を見て私は、本当に有難いことだなと思いました。

最初の自己紹介の場面では、前もって自分の中では、いろいろイメージしていたのですが、いざその



多くのお客様で埋まった会場

時を迎えるとなかなか思っていたように話ができませんでした。そして、私は、途中声が詰まってしまい一体どこから歌い始めたらよいのか分からなくなり頭の中が真っ白になりました。また、患者さんたちのあたたかい眼差しに思わず胸が詰まりそうになった場面もありました。メインボーカルの中園さんが曲の間に上手に短い話をして、全体の流れをリードしてくれました。そして、私は大きく音を外すミスを本番でもしましたが、練習中のようギターの梅本さん、キーボードの矢倉さんに音を合わせてもらいました。そして、アイタさんと池田さんは、中園さんと共にお客様のところへ行き、そこで一緒に歌うことができました。ある人は、マイクを手に熱心に歌ってくださる人もいて、本当に嬉しかったです。皆さんおなじみの曲の時は、多くの方が口ずさんでいました。次回、もしまたこのような機会があれば、お客様にもマイクを持ってもらい積極的に歌ってもらうと楽しい内容になると思いました。私たちは、みなさんから手拍子をもらいながら、また励ましの声援をいただきながら私たちは最後まで歌うことができました。



お客様と一緒に歌いました

コンサートを終えて

コンサートが終わってから私たちは、何人かのお客さんや病院のみなさんからもあたたかいお言葉をいただきました。私たちは、また歌を通して多くの人たちと触れ合うことができればと思いました。そして、次回はお客様にマイクを渡して私たちと一緒に歌ってもらえるような内容にしていきたいと思います。まだ反省点もありますが、私たちは、患者さんをはじめ多くの人々に支えられて2007年のクリスマス会を成功のうちに終わることができました。このイベントは、私たちは学生時代のよい思い出の1ページとなりました。

メンバーからの感想

(工学部感性デザイン工学科2年 矢倉由果里)

今回の演奏会は、私にとって、音楽活動の可能性を広げてくれるものになり、大変いい経験になりました。これからも、機会があればこのような活動に参加していきたいです。

(医学部保健学科看護学専攻4年 中園愛子)

コンサートが終わって患者さんが「病名を告知されてすごく絶望的だったけど、もう一度クリスマスソングが聴けるとは思わなかった。今日からまた再出発だ！」と笑顔で言って下さった時、私はとても胸が熱くなりました。自分では気付かないけど、高齢の方にとって若者の元気や活力は副作用のない『薬』だと改めて感じました。今春から社会人1年生となります、やはり患者さんあっての私たちなので、日々の業務だけでなく患者さんの心に寄り添っていくケアを見失ってはいけないと思う。歌に涙された繊細な患者さんのお気持ちをこれからも大切にしたいです。

(医学部保健学科看護学専攻3年 梅本まりや)

毎日病気と向き合っている患者さんに、喜んでもらいたい、リフレッシュしてもらいたいという思いから、今回のボランティア演奏を企画しました。演奏を通して私たちが患者さんにパワーを与えるだけでなく、私たちも患者さんから沢山のパワーをいただき、とても暖かい気持ちになりました。ある患者

さんが言われた「これで明日からも頑張れる。」という言葉が忘れられません。今後もこうした活動が広がっていけば嬉しいです。

(医学部保健学科看護学専攻3年 グルン・アイタ)

人前で、しかも大勢の人たちを前にして、しかも日本語で歌うなんて初めての経験でした。とても緊張しました。それで、歌詞を忘れてしまい、どうすればいいか戸惑っているとき、患者さんたちが拍手で「頑張れ！」って励ましてくれて、一緒に歌つてくださったとき、もううれしくてうれしくて目頭が熱くなりました。一生忘れられないクリスマス会になりました。

(医学部保健学科看護学専攻3年 池田友美)

ギター・キーボード・ハーモニカ・鈴・・・なんでもオッケーです！ 上手下手関係なし！ のんびり楽しくやってます。興味がある人は是非一緒にやりましょう！待ってます。

(医学部保健学科看護学専攻3年 村山久和)

参加学生は、工学部、医学部からそれぞれ集まり、この構成にも学生の有志の集まりと言う意味があり、学年も2年生から4年生までというメンバーでコンサートに臨みました。クリスマス会までの準備は、それぞれ忙しいスケジュールの中でいろいろ打ち合わせをしながら曲の練習に励んでいました。

私たちは、このイベントに参加して多くの患者さんとふれあうことができました。そのふれあいを通して私たちは人々の温かさを心から感じることができました。大勢で何か素敵なことを分かち合うということで、大きな喜びを味わうことができました。

この企画を立ち上げてから本番に至るまで、山陽病院の職員の皆様をはじめ山口大学の先生方々や教務係の方々から多くのご支援をいただき私たちはコンサート当日を迎えることができました。音楽を通して患者さんや病院の職員のみなさんに季節を感じていただければという思いでこのイベントに参加しました。会場の皆様からは、たくさんの声援をいただきました。このイベントは、学生時代の楽しい思い出のひとつになりました。

私の授業

くわはら あきのり
秦原 昭徳
教授
教育学部
幼児教育講座



鳥取県西伯郡伯耆町・日光小学校5・6年複式学級で
総合的学習「ゴッホのひまわり」を指導する筆者と子どもたち（2007年2月20日撮影）

わかる授業をつくる先生

教育学——わかる授業の理論と実践が中心

共通教育の始まった平成8年度から19年度まで「教育学」関係の講義を担当してきました。ここで関係という言葉を使ったのは、平成17・18年度に「小2国語『ニャーゴ』を教える」「小学校教授学の試み」などのテーマをつけて主題別講義を担当したからです。

「教育学」は前半と後半に分けて2人での講義、主題別の場合には、15コマ分を1人で講義しました。この12年間で、延べ8回、15コマ換算で5つの講義を担当したことになるでしょうか。

どの講義も、学校現場での教師の中心的な仕事である「授業」の理論と実践に焦点をあてて、具体的でわかりやすい授業を心がけてきました。

使用しているテキストは、題名にもつけてある拙著『わかる授業をつくる先生』です。

陶冶と訓育の理論と私の講義

教育学の中に「陶冶と訓育の理論」があります。

「陶冶」とは、授業の中で習得する知識・技能・認識などの学習内容の習得を指し、「訓育」とは、遅刻・私語・忘れ物をしないで本気で真面目に、努力して学び取るなどの人間らしい生き方の教育を

指します。この陶冶と訓育の二つが機能して、はじめて全うな教育となります。

ですから、私の講義の初回では、次の「受講上の注意」をあえて詳しく説明することにしています。

①この講義の受講者の中には教職を志望している学生がいることを前提に、講義をします。

教育の現場では、真面目さ、熱心さ、誠実さも「教師の実力」の内です。学校現場での「授業」が成立するためには、授業の秩序づくりの指導も重要です。

（以下は、簡略に）

②講義は定刻に始めます。

（授業者は8：20教室着）

③講義中の私語は、厳禁です。

（もちろん携帯電話も）

④毎回の講義要項は、自分で受け取る。

⑤要項ミニレポ欄の番号は、自分で活かして。

⑥ミニレポを提出して、1回の出席とみなす。

⑦受講の仕方、ノートの仕方などの工夫を。

人、94.1%）、遅刻者は10人（5.9%）。

遅刻者には、教室入口近くでしばらく待ってもらい、講義の区切りを利用して要項や資料を配布します。

前半最終第8回目の始まり方

「教育学」の前半担当の秦原講義の最終回は第8回目となります。平成19年度の受講者は、特に真面目であったことも勘案して、秘蔵の授業ビデオを見てもらうことにしました。

この日の出席状況は、8：20（11人）、8：30（54人）、定刻8：40（163人、97.0%）、遅刻者は5人（3.0%）でした。

4年生・院生・留学生・現場教師も受講

今年度の教育学講義には、採用試験に合格した4年生・院生5人と祖国の中国で教師を目指す留学生も受講してくれました。

月曜日の講義には、時に現場教師が出席してくれることもあります。学校現場での日曜行事の代休措置のお陰です。共通教育とはいえ、いずれ4月から教壇に立つ新任教師にも、現職の教師にも役立つ講義を目指しています。

学内連絡先

TEL：083-933-5441

E-mail：kuwahara@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究



田中 たすく
佐

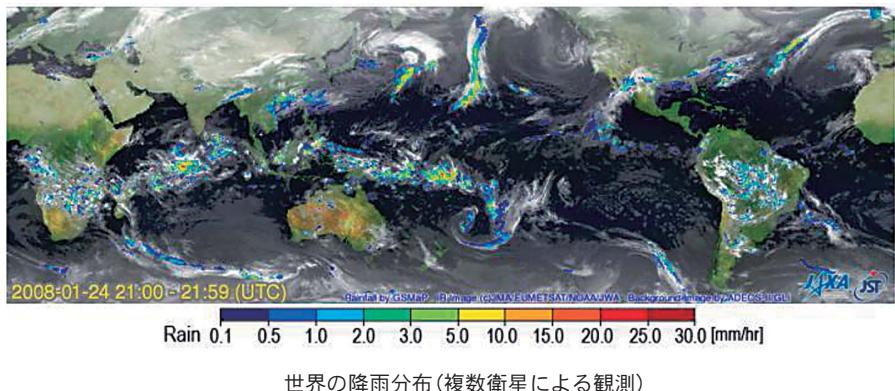
教授

大学院理工学研究科
システム設計工学系専攻

私の研究は人工衛星による地球環境の観測（衛星リモートセンシングとも言います。）です。現在20以上の地球観測衛星が地球を周回し、膨大な観測データをNASA（アメリカ航空宇宙局）、JAXA（宇宙航空研究開発機構）その他の宇宙機関が受信・処理して直ちにインターネット上で公開しています。こうした人工衛星観測システムが大規模に運用されていることはあまり知られていないと思いますが、その成果について例えば南極上空のオゾンの減少、熱帯雨林の伐採については多くの方がご覧になつたことがあると思います。また昨年発表されたIPCC（気候変動に関する政府間パネル）レポート温暖化報告の基になっている観測データには多くの衛星観測データが用いられています。衛星観測は地球全域をカバーし、立ち入ることの出来ない地域も観測できる長所があり温暖化をはじめとする地球環境監視には欠かすことの出来ないシステムと考えられるようになりました。

衛星リモートセンシングとは太陽光、地表面からの熱放射、ライ

人工衛星による地球環境の観測



ダー・レーダの3種を光源とし、紫外光からマイクロ波までの電磁波の反射波あるいは散乱波を衛星から観測して地表面と大気の物理量を導出することです（リトリーバルと言います。）衛星リモートセンシングの歴史は宇宙開発の中で古く、世界最初の人工衛星スputnik打ち上げ3年後の1960年にNASAが打ち上げたTIROS衛星による雲画像が最初です。その後、皆さんにおなじみの気象衛星やランドサット・JAXAの大地による地球の高分解画像と発展してきました。最近ではただ画像を作るだけでなく海面水温、大気中のオゾン濃度・水蒸気量等の地球環境の健康状態を示す物理量を計測しています。

私の研究室では、地球温暖化に大きな影響を持つと考えられていますが、その特性の不明な大気中の雲・エアロゾルのレーダー・ライダー観測によるリトリーバルを研究しています。温暖化の元凶と考えられています炭酸ガスのフーリエ分光計観測による濃度分布のリトリーバルも研究テーマです。衛星観測は地球全域をカバーでき

ますが、地上1地点はサンプル観測になります。サンプル観測の統計的特性を明らかにすることも研究テーマです。以上は2年前まで勤めていたJAXA以来の研究テーマです。

山口大学に移ってから、インターネット上で公開されているリモートセンシングデータの新しい応用方法がないかと考え、インドネシア海域の複数データによる解析、山口県のMODIS（NASA打ち上げの観測器）による解析を新たに始めました。現在インターネット上で公開されている多種多量データの利活用の途があることを示すことは大学の社会的使命と考えて取り組んでいるところです。衛星リモートセンシングでこんなことが出来ないかなと考えている方は私の研究室をお尋ねください。最後に衛星観測データの例として2008年1月24日の世界の降雨を示します。

学内連絡先

TEL : 0836-85-9128

E-mail : tttanaka@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究



近久 博志

教授

产学公連携・創業支援機構
地域共同研究開発センター

これまでの研究

岩盤工学、少し耳慣れない言葉ですが、ダムや地下発電所やトンネルや長大法面などの構造物の計画や設計に活用される技術分野です。その岩盤工学の分野では、個々の技術がそれぞれ複雑に絡み合っているため、個別技術をバランス良く活用して、全体最適化を図っていくことが重要とされています。私の研究室では、岩盤工学に関する計画・調査試験・設計・施工・維持管理の実務に携わっている研究者や技術者と一緒にになって、現場や構造物に適用できる実務的な技術の研究開発に取り組んでいます。

1) 研究プロジェクトのマネージメント

これまで国土の保全やインフラ整備だけに活用されてきた土木技術、特に、地盤構造物に活用されてきた技術の新しい活用分野を模索するための研究開発を実施しています。

- ・地域防災に役立つ技術の研究開発と防災分野における新たな事業モデルの構築（地域防災研究会、<http://ersm.crc.yamaguchi-u.ac.jp>）
- ・地域再生のための産業遺産の有効活用（神戸市の山間部掘削土砂の運搬用ベルコンントンネル、宇都宮市の大谷石採掘跡地などの再利用）
- ・岩盤地下空洞を利用した新しい施設の計画提案（地下冷凍倉庫、

省エネ型情報装置に向けた地下データセンター、延長50kmの二本の直線トンネルと地下大空洞からなる国際リニアコライダー施設など）

2) 国土の有効利用に向けた地下空間利用施設の計画と設計に関する研究開発

道路や鉄道や地下発電所などで活用されているトンネルや地下大空洞の計画技術や設計技術を研究開発しています。そして、特に、不特定多数が入場する岩盤地下施設を目的として、高山祭りミュージアム（図-1、<http://www.tt.em-net.ne.jp/~teda/takayama/takayama.html>）、トンネル式穀物倉庫、トンネル式ワインセラーなどの建築構造物としての地下施設の実現につなげています。



図-1 高山祭りミュージアム（世界で唯一の本格的な人工の岩盤空洞を利用した地下式美術館、空洞直径40m、最小土被り31m、1995年建築評定を取得）

3) 岩盤や地盤を対象にした設計・解析手法の研究開発

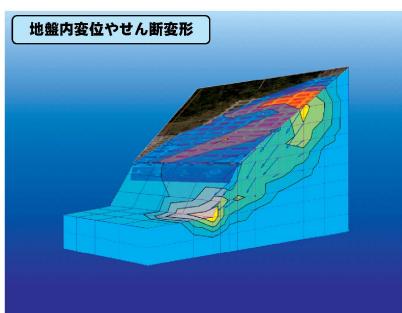
経済的で、高品質な地盤構造物の創造を目的とした地盤物性の調査・試験と設計・解析手法の研究開発に取組み、つぎのような構造

物で活用しています。

- ・応力変形解析システムの研究開発と実構造物への適用（青函トンネル、サイロットNATMの成田空港トンネル、大断面空洞の東北電力本道寺地下発電所、シンガポール地下鉄104工区など）
- ・熱伝導解析システムの研究開発と実構造物への適用（関西電力長谷ダムや水資源公団浦山ダムなどのマスコンクリート温度管理、東京湾アクアライン川崎人工島や下水道事業団尾久上幹線下水工事の地盤凍結工法など）
- ・浸透流解析システムの開発と解析
- ・浸透流・熱・応力の連成解析とその逆解析システムの開発（九州新幹線第2今泉トンネル、膨張性地山の国道274号線稻里トンネルなど）

4) 現場計測データを設計にフィードバックする評価手法（情報化施工技術）の研究開発

低コストで高品質な土木建築構造物の実現に向けた現場計測システムと得られた計測データの設計へのフィードバック手法を研究開発して、実際の構造物の施工に役立てています。



図－2 時期を換えて取得した複数枚の写真画像から法表面、さらには、地盤内の変位や地盤の強度特性を評価（VisualGeoMechanics）

- ・地盤構造物を対象とした現場計測データを設計へのフィードバックするための情報化施工技術の研究開発と実構造物への適用（北陸自動車道頭山トンネル、下水道事業団中川処理場など）
- ・土木建築構造物の現場計測器（光学式地盤内変位計、光学式流向き流速計（図-3）、精密写真測量システム、FBG光ファイバー計測器の開発）とそのデータ評価システムの開発（三遠南信自動車道草木トンネル、県道256号線清内路トンネル、国道361号線権兵衛トンネルなど）
- ・計画、設計、施工から維持管理に至るまでの長期間に渡る構造物の品質管理のためのMR

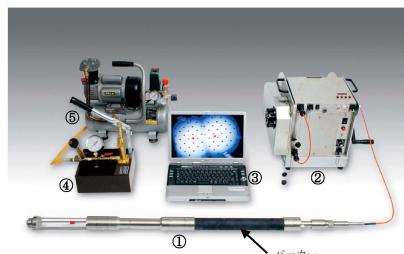
(Mixed Reality) 技術の研究開発と実構造物への適用（東北新幹線八甲田トンネル、永平寺ダムなど）



図－5 ノートパソコンで実現したMRシステム（CCDカメラで取得した実画像からPCの位置や傾きを自動認識し、三次元のCADデータを合成する）

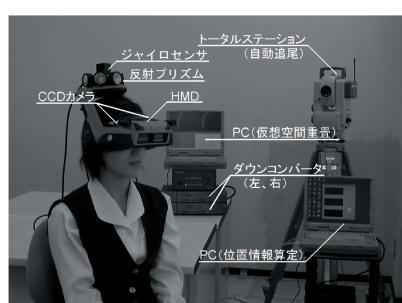
おわりに

岩盤や地盤に関連する構造物、特に、不特定多数が入場する地下空間の計画、設計、施工管理全般にわたる実務的な研究を進めています。地盤構造物の実務面に即した研究内容が主体ですが、興味のある方は、お気軽に、研究室のWebページ、または、研究室にお立ち寄りください。



① CCDカメラとプリズムを組み合わせた方位計内蔵の光学式流向計本体部
② 本体部の上げ下げを機械的に行うケーブル巻き取り装置
③ 画像表示および取得画像保存装置（画像処理ソフト内蔵）
④ 微量押出し調整機能付き清水用の固体トレーサ注入装置
⑤ 本体部を所定深度に固定するパッカー用の加圧装置

図－3 三次元地下水流行流速計（一つのボーリング孔で地下水の三次元方向の流向流速を測定）



図－4 シースルー型ヘッド・マウント・ディスプレイを使ったMRシステム（透過型ヘッド・マウント・ディスプレイに映される画像に三次元CADデータを合成することによって、現実空間と仮想空間が一体となって見える）

学内連絡先

TEL : 0836-85-9980

E-mail : chikahis@yamaguchi-u.ac.jp

URL : <http://geoeng.crc.yamaguchi-u.ac.jp>

教員から寄せられた著書



纈纈 厚『부활하는 일본의 군국주의(復活する日本の軍国主義)』

(제이앤씨(韓国、J&C出版) 2007年11月発行)

纈纈 厚『憲兵政治 監視と恫喝の時代』(新日本出版社 2008年2月発行)

前者は、韓国で2冊目の出版となる書物です。台湾の雑誌『批判與再造』に過去2年間に8回に分けて連載した「新日本軍国主義の現段階」と題する論文をベースにしています。現在、中国・台湾・韓国など東アジア諸国では日本の現代政治への関心が高まっています。戦後日本の保守体制、保守主義、保守政治など戦後日本の保守構造を全体として把握する中で、個別テーマとしての安全保障、自民党政治、新軍国主義などが活発に議論され始めています。そこには戦前日本との連続性を意識しながら、新たな日本の脅威への警戒心が看取れます。本書は、そのような動きのなか戦後日本の保守政治を歴史問題や軍事問題などの視点から筆者なりに分析した内容となっています。現代史の分野は極めて流動性の高い領域だけに目線を一定の位置に据え置く必要があります。本書では、戦前と戦後の比較史的な考察を主眼におきま

した。また、本書は、近々台湾で、年内には中国でも出版される予定です。

後者は、昨年世論調査で話題に上った陸上自衛隊情報保全隊による国民監視行動が、戦前の「憲兵政治」を想起させたことを踏まえて、憲兵史を再構築する試みとして書き下ろしたもので、戦前期国家や軍部による国民監視が祖師的に実行されていたことは周知の歴史的事実ですが、特別高等警察(特高)に関する資料・文献、あるいは研究書が数多出版されているなかで、憲兵組織については、長らく秘密のバールに包まれていたと言つても過言ではありません。筆者は、言論弾圧史への関心を抱いてきた近現代史研究者として、この研究の隙間を埋めるために昨年夏に取り組んだ成果が、この本に表れています。資料や年表も添え、読みやすさにも注意を払っています。

纈纈 厚 教授 人文学部 人文社会学科
TEL : 083-933-5278 E-mail : koketsu@yamaguchi-u.ac.jp



必携！相互理解を深めるコミュニケーション実践学

(林徳治・沖裕貴：編著 (株)ぎょうせい 2007年4月15日初版発行)

「情報」が核となりコンピュータやネットワーク技術が重要な役割を果たす現代社会では、効率、正確、迅速、利便性などが優先されてきました。その結果、私たちはさまざまな面でその恩恵を受ける一方、科学技術主導が進む中で見過ごされてきた相互理解のためのコミュニケーションにかかる社会問題が多発、顕在化するようになってきています。本書で言うところのコミュニケーション能力は、とりわけ教育活動における相互理解を目的としており、そのファクターとして「批判的思考能力(クリティカル・シンキング)」「論理的思考能力(ロジカル・シンキング)」「表現・伝達能力」に焦点を当てています。コミュニケーションの基盤となるのはクリティカル(批判的)に考える力であり、これには論理的に考える力が大きく関与します。すなわち、与えられた情報を確かな論拠に基づいて判断し、その上で自分の考えを適切に相手に伝えることでより円滑なコミュニケーションが成り立つのです。筆者らは、これら各能

力を総合的に育成することにより相互理解を深めるためのコミュニケーション能力が育成できると考え、教育、芸術、経済、国際など多様な分野の専門家9人が研修プログラムを協同開発し、テキストとしてまとめました。

本書は、コミュニケーションに関する新しい理論(知識・技術)の習得を目的としたものではなく、読者が日頃の自分のコミュニケーション活動を振り返ることでその人間関係がより改善されることを主なねらいとしています。そのため「Learning by Doing(なす事により学ぶ)」が可能なよう、実践的なトレーニング手法を重視した内容で構成してあります。特に、①トレーニングを主体にしたグループ学習を基本としていること、②幅広い分野でのコミュニケーション学習に活用できること、③必要な教材教具や資料がトレーニングごとに記載されていることなどを特徴としています。読者のコミュニケーション能力の向上や人間関係の改善に本書が少しでもお役に立てば幸いです。



林 徳治 教授 教育学部 / 教育学部附属教育実践総合センター長
TEL : 083-933-5461 E-mail : hayashi9@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書



交通とビジネス：交通論おもしろゼミナール

(澤喜司郎・安原敬裕・上羽博人編著 成山堂書店 2007年3月発行)

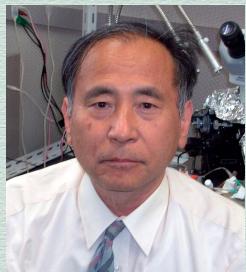
交通論では動力、運搬具、通路を交通の3要素といいます。動力とは運搬具を動かすための力をいい、動力はかつての人や牛馬などの動物の力、風や川の流れ、重力などの自然の力から、蒸気機関、内燃機関、電気機関へと発達し、現在ではリニアモーターも実用化されています。運搬具とは人や貨物を運ぶための用具で、クルマや飛行機、船舶など大半の交通機関では動力と運搬具が一体化されています。通路とは運搬具が通行する路(道路や軌道、航路、空路)で、広義には鉄道の駅舎や空港、港湾なども含みます。理論的には時間も通路といえます。一般的な通路としてのトンネルや橋梁などは、交通の利便性(所要時間の短縮)など交通の質的向上に大きく貢献しています。

交通機関とは距離を克服するためのもので、物理的な距離と速度と時間の関係を念頭に、動力、運搬具、通路、そしてこれらの3要素によって実

現される交通サービスを現代のビジネスの観点から論及したものが本書です。ロケット・ビジネスや宇宙旅行、瀬戸大橋とパナマ運河、リニア新幹線とりニア地下鉄、環境に優しいLRT、整備新幹線とりニアモーターやセク鉄道、世界一周のクルーズ船と離島航路、空港や港湾、それにカーナビやETC、新幹線公害裁判や自動車道低周波音公害裁判、自動車排ガスと環境問題、マクドナルドと物流、旅行と観光にいたるまで、私たちの最も身近な経済的現象であり事象である交通の重要性と今後の課題などについて解説しています。

また、地球温暖化が進む一方で、石油の枯渇を前に控えた現在、交通をどのように変革していくのか、人口が減少していく中で地方では公共交通機関をどのように維持していくのか、このような問題意識を執筆者が共有しつつ本書は編纂されています。

澤 喜司郎 教授 経済学部 国際経済学科
TEL: 083-933-5553 E-mail: sawa@yamaguchi-u.ac.jp



香りの科学はどこまで解明されたか—アロマテラピー・森林浴・嗜好飲料—

(青島均 著 フレグランスジャーナル社 2007年8月10日発行)

この本は、現在どのように香りの効果が科学的に解明されているかをまとめたものです。著者は次の4つが総合的に働いて、香りの安らぎ効果を引き起こしていると考えています。1) 鼻を通した嗅覚系からの作用、2) 体内に取り込まれ脳内のGABA_A受容体などの受容体を通した作用、3) 嗅覚系以外の視覚、聴覚、味覚、触覚あるいは運動に伴う効果、4) プラシボ効果。著者が提案している2)の記述が量的には中心になっています。

最初の章に著者の香りの効果についての考え方をまとめ、その後の章で実験結果を紹介しながら内容を詳しく述べました。ドラマの「刑事コロボ」では、最初に殺人場面を見せて犯人を示した後に犯人を追い詰めていく演出をしていましたが、それに倣って最初に結論を述べ、その後になぜそのような結論が得られるのか実験結果を述べつつ解説しました。

この本は、放送大学山口学習センターの面接授業「嗜好飲料、香りと気分」、高校への出前講義「アロマテラピー、森林浴、嗜好飲料の香りと安らぎ効果」あるいは市民向け講座「香りのリラックス効果」などで話した内容をまとめました。またISS産業科学システムズ主催の技術セミナー「香りの安らぎ効果とGABA受容体の役割～分子レベル（受容体）から動物行動、製品開発まで～」に準備した資料を基にしましたので、香りを使った製品開発の現況やアイデアもまとめて述べました。

読者としては、アロマテラピーや森林浴に興味を持ち生活に取り入れて楽しんでいる人、アロマテラピーを医療に取り入れることを考える医療従事者、香りの特性を考えて嗜好飲料などの製品開発に活かしたい研究開発者などを対象と考えています。もちろん特定の目的を持たずに一般教養書として読んでいただくことも期待しています。

青島 均 教授 大学院医学系研究科 応用分子生命科学系専攻
TEL: 083-933-5762 E-mail: aoshima@yamaguchi-u.ac.jp

平成20年度公開講座のお知らせ

講座名・講師名	受講対象者	開講期間	時間帯
歩いて、学んで、理解する。カタログがない秋吉台 講師：前田時博（秋吉台エコミュージアム館長）、配川武彦（秋吉台科学博物館館長）、長畠 実（エクステンションセンター長）、多賀谷三枝子（秋吉台の山姥（やまんば）、永嶺克博（とってもゆかいいな秋吉台ミーティング）	市民一般（成人対象）	4/19～4/20	10:00～17:00 10:00～13:00
薬は毒、毒は薬 講師：柴田 浩（山口大学名誉教授）	市民一般	5/10～5/24 (毎週土曜 計3回)	14:00～16:00
「おくのほそ道」を読む 講師：藤原マリ子（教育学部教授）	市民一般	5/17、31、 6/14、28、7/12	14:00～15:30
小麦栽培から始めるパンづくり 講師：高橋 肇（農学部教授）、井上敬之（農学部附属農場技術職員）、高田兼則（近畿中国四国農業研究センター）、徳永 豊（スリーヒルズアソシエイツ代表）、中司祐典（山口県農林総合技術センター）	市民一般（成人対象）	6/4、8/20、11/5	10:00～15:00
女性のいきいき健やかライフのための健康講座（防府会場） 講師：松田昌子、田中満由美（大学院医学系研究科教授）、岡野こずえ（同准教授）、中尾富士子（同助教）、山元公美子（同助手）	概ね40歳以上の一般女性	6/7、21	13:00～16:00
「世界の教育と学校」を探索する —「世界の学校文化」、「世界の学校の3類型」、「英国の教育と日本の教育改革の関係」、「世界1位のフィンランドの教育」— 講師：小川 勤（大学教育センター教授）	市民一般	6/21、 7/5、12、19、26、 8/2	13:00～15:00
プロの技術で挑む小麦栽培から始める地産地消のパンづくり 講師：吉見匡司（嘉川興業株式会社）、未成秀一朗（創作ベーカリー秀「Shu」店長）、高橋 肇（農学部教授）	平成16～19年度の公開講座「小麦栽培から始めるパンづくり」の受講修了者	6/25	10:00～15:00
電波で見た宇宙の姿 講師：藤澤健太（大学院理工学研究科准教授）	市民一般	6/7～7/5 (毎週土曜 計5回)	14:00～16:00
木工入門 講師：岡村吉永（教育学部准教授）	市民一般（小学生以上）	①8/8～8/10 ②8/29～8/31	8:30～13:00
今日から始めるグリーンライフ講座 講師：田中秀平、高橋 肇（農学部教授）、藤間 充・竹松葉子（同准教授）、嘉村則男（農学部附属農場・技術専門職員）、高田 曜（同技術職員）	市民一般	8/29、10/3、 11/28、H21.2/6	10:00～15:00
香りを科学する 講師：梶原忠彦（山口大学名誉教授）、松井健二・青島 均（大学院医学系研究科教授）、赤壁喜彦（農学部准教授）	市民一般	8/30～9/27 (毎週土曜 計5回)	13:30～15:00
農山漁村での安らかな暮らしを願って、柿本人麻呂を祀る 講師：吉村 誠（教育学部教授）、坪郷英彦（人文学部教授）、高山宣道（八幡人丸神社宮司）	市民一般（成人対象）	9/27～9/28	13:00～16:00 10:00～13:00
難病と戦う 講師：田口敏彦（大学院医学系研究科教授）、根来 清（同准教授）、檜垣真吾（医学部附属病院准教授）、川井元晴・湯尻俊昭（同講師）、中村浩士（同助教）	市民一般	9/22、29、 10/6、20、27、 11/10	19:00～20:30
山口の火山のふしぎ 講師：大和田正明（大学院理工学研究科教授）、澤井長雄・阿部利弥・永尾隆志（同准教授）	市民一般	10/4	10:00～16:00
やまぐちサタデー・カレッジ2008（外国語学習コース：英語） 「レシピで学ぶ英語」 講師：皆尾麻弥（人文学部講師）	市民一般・学生	5/10～6/28 (毎週土曜 計6回) (※5/31、6/21を除く。)	13:30～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2008（現代文化コース） 「言語と文化」 講師：平野尊識（人文学部教授）	市民一般・学生	10/4～10/25 (毎週土曜 計4回)	15:10～16:40
やまぐちサタデー・カレッジ2008（異文化交流コース） 「中国の古典文学」 講師：阿部泰記（大学院東アジア研究科教授）	市民一般・学生	10/4～10/25 (毎週土曜 計4回)	13:30～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2008（異文化交流コース） 「ヨーロッパ古寺巡礼－イタリア、ドイツ、オーストリア」 講師：坂本貴志（人文学部准教授）	市民一般・学生	11/8～11/29 (毎週土曜 計4回)	15:10～16:40

山口大学エクステンションセンター

〒753-8511 山口市吉田1677-1

TEL(083)933-5059

E-mail:kyoutu@yamaguchi-u.ac.jp

・電話受付の場合：月曜～金曜 8:30～17:00 (土・日・祝祭日は除く)

お問い合わせ・申し込み

新聞掲載された山大・地域から見た山大

10月

- ◆ **ひと** あす日本医師会医学賞を受ける
西田 輝夫さん
画期的研究で角膜再生に道開く
(宇部日報:31日)

11月

- ◆ 道州制・国体・・・知事が講義
山大生60人 熱心に聴講 (朝日:1日)
- ◆ **第64回中国文化賞** 沖田 極氏 (社会保険下関厚生病院長・山大名誉教授)
肝疾患に有効な治療法を開発
国民病に立ち向かう (中國:3・15日)
- ◆ A E D1台周南市に寄贈
山大医学部同窓会 (中國:3日)
- ◆ **感染症治療に近紫外光**
人に優しい殺菌力
山口大院チームが確認
(白井 瞳訓教授・東 慶直講師) (読売:4日)
- ◆ 山大で県職員採用説明会
-山口大常盤台キャンパス-
受験者数減少受け 大学生対象、初の試み
(山口:8日)
- ◆ 宇部まつり会場でA E Dの普及活動
山口大先進救急医療センター(宇部日報:7日)
- ◆ **山口大工学部 エコファイターズ**
卒業生らの不用品ネットで情報提供
「再利用サイト」を開発中 (宇部日報:7日)
- ◆ 歌劇、交響曲を披露
山大医・工学部管弦楽団 (宇部日報:7日)
- ◆ ライブなど多彩
10日から「医学祭」
エイズ予防講演も (宇部日報:8・10日)
- ◆ 10日に知的財産教育フォーラム
-山口大医学部- (宇部日報:8・12日)
- ◆ 山口大のN P O法人「学生耕作隊」理事長の近藤紀子さん
農地再生に取り組む (中國:9日)
- ◆ **問題集** 初心者でもカンタン
-経済学部准教授・山根和明氏-
T O E I C問題集 (サンデー山口:9日)
- ◆ 広島など3教室で模擬講義を開催へ
山口大大学院M O T (中國:10日)
- ◆ 第7回環境・設計セミナー
-26日全日空ホテル-
関根雅彦・大学院理工学研究科教授
「山口湾干潟再生への取り組み」講演
(宇部日報:10日)

◆ フォーラム

知的財産に理解深める -山大医学部-
複合的視点持った人材育成を
(宇部日報:12日)

◆ 若者同士エイズ予防

山大学生グループの「カフェ」6年目
来月新行事、輪に広がり (朝日:13日)

◆ 副隊長に山大の大和田正明教授
-第50次南極観測隊- (山口:14日)

◆ 統合失調症

胎児期脂肪酸不足で?
山大など共同研究・関与の遺伝子特定
妊婦栄養指導で予防も視野 (山口:14日)

◆ 山大理学部長に増山教授が再選
(山口・中國:15日)

◆ 漫画家の仕事は多彩
山大客員教授弘兼さん初講義
(山口・読売・中國:15日)

◆ 16日から環境工学フォーラム

最先端の研究を発表
-18日まで山大工学部-
(宇部日報:14・19日、読売:15日、山口:16日)

◆ 笑顔の交差点

フォーラム準備に奔走
-大学院理工学研究科教授の今井剛さん-
痛み分かる医師に
-医学部4年杉本至健さん(医学祭実行委員長)-
(宇部日報:15日)

◆ 未来科学講演会

29日に山口大工学部 (宇部日報:15日)

◆ 中国文化賞

「肝臓研究認められた」
下関厚生病院長沖田さんが喜び(山大名誉教授)
(中國:15日)

◆ 3大学合同ジョブスタディ

就活控え職業観に磨き
あす山口大 大手6社担当招く (中國:16日)

◆ 竹資源の活用など推進

-委員長・村田秀一山口大副学長-
バイオマстаун構想策定委が最終案
(宇部日報:16日)

◆ 山口大演劇部が冬公演 -山口市の大学会館-
来月18、19日「贋作・罪と罰」
(宇部日報:19日)

◆ すごい!台風発生 -鵜ノ島小-
山大大学院理工学研究科山本哲朗教授が
装置使い授業 (山口・毎日:20日)

◆ 学術交流協定を締結

-山口大と英国U C L(長州ファイブ留学先)-
教育・研究協力を拡充
次世代担う人材育成へ
(西日本・山口・中國:20日、西日本:22日)

- ◆ 企業の採用担当が“本音”
山口大で異業種合同セミナー（読売：21日）
- ◆ メーンケーブルの滑り原因－下関・橋崩落－
事故調査検討委「さらに調査必要」
(委員長＝古川浩平・山口大工学部教授、5人)
(読売：21日)
- ◆ 山大工学部長三浦氏が再選
(山口・宇部日報：22日、朝日：23日)
- ◆ 萩のにぎわい復活目指し
ICカードで観光客調査
市と山口大、動向を把握へ（西日本：24日）
- ◆ あじす保育園で山大教授が講演
－山口大教育学部教授・同大附属山口小学校
山田次郎校長－（山口：26日）
- ◆ 患者や家族のニーズ探る
市地域緩和ケア研究会
学生の遺族調査発表も（宇部日報：26日）
- ◆ あざの耕平さん母校山大で講演
1日「作家への道」
(朝日：27日、読売：30日、山口：12月5日)
- ◆ 山口大教育学部の林教授に聞く
被害防止へ窓口を
家庭内ルール共に決めよう（中國：27日）
- ◆ 最終章 あすへの提言 ⑦
環境首都への道
－山大工学部准教授榎原 弘之さん－
交通問題と町づくりは一体
コンパクトシティーに注目（宇部日報：27日）
- ◆ よく分かる防災授業
児童も学ぶまさかの備え
山口大附属光小で山大大学院理工学研究科
山本哲朗教授（中國：29日）
- ◆ 県内の海域整備で意見交換
国交省環境・設計セミナー
山口湾干潟再生など学ぶ
山口湾の干潟再生の取り組みを話す
関根教授（宇部日報：29日）
- ◆ 山口署員や大学生放置自転車を撤去
JR湯田温泉駅
(朝日：29日、中國：30日、読売：12月1日)
- ◆ 基幹病院に医師集約－小児・産科－
山口県 計画策定へ本腰（中國：30日）
- ◆ 自然光に近い白色LED
－山口大田口 常正教授－
山口大、明るさ電球の6倍（日経：30日）
- ◆ あす「エイズデー」企画－コスモプラザ－
山大的学生が音楽通じ啓発
(宇部日報：30日)

12月

- ◆ 第7部 理想の海へ ⑤
海と生きる周防灘と周辺
環境に優しい生活を
大量消費見直す必要
宇部環境国際協力協会理事長浮田正夫さん
(山口大名誉教授)（中國：1日）
- ◆ 二挺唐樋の価値探る
山大日下達朗名誉教授が現地調査
(宇部日報：1日)
- ◆ 中四国学生駅伝
山口大A 9位県勢最高
目標達成有終ラン 山口大A 3区井上選手
(中國・読売：3日)
- ◆ 本場のジャズ演奏学ぶ
山大医学部経音楽部員 米のバンドが指導
(読売・中國：3日)
- ◆ 第7部 理想の海へ ⑥
海といきる周防灘と周辺
現存の観光資源活用
地元の魅力に自信を
－山口大経済学部観光政策学科長
篠原 淳教授－（中國：4日）
- ◆ 最先端の生命科学紹介－山口大工学部－
袖岡さん(理化学研究所主任研究員)招き
講演会（宇部日報：4日）
- ◆ 感染症の正しい知識を
人権のつどいで呼び掛け
－「感染症から人権を考える」をテーマに
講演する谷田教授－（宇部日報：4日）
- ◆ ひとこと
中国四国学生駅伝で補助員をまとめた山口
大陸上部駅伝係
坂本 奈津季さん(21)=理学部3年
(中國：5日)
- ◆ 第7部 理想の海へ ⑦
海といきる周防灘と周辺
利用別に水質管理を
全体見渡す研究必要
榎野川河口域・干潟自然再生協議会会長
中西 弘さん(山口大名誉教授)（中國：5日）
- ◆ 地震の発生を学ぶ
西岐波中SPP
山本哲朗教授(工学部)が体験型授業
(宇部日報：5日)
- ◆ がん女性患者のメンタルケア
山大で17日お化粧講座（読売：8日）
- ◆ 技術を利益に結ぶ
山大MOT国際会議
海外20ヶ国の研究者が討論
3大学の協定調印も（宇部日報：6日）

- ◆ 日本真空協会から技術賞
 山大工学部、新光産業など研究グループ
 産学連携の実用化、評価
 受賞者（敬称略）
 栗巣普揮、山本節夫、松浦 満、
 木元 剛、藤井寛朗、田中和彦
 （宇部日報：8日）
- ◆ 冬の献血不足補おう－山口－
 学生ら協力呼びかけ（読売：9日）
- ◆ 通学やドライブ 初心忘れず運転
 －山大で交通安全講習－（山口：13日）
- ◆ 休眠特許
 伝統工法で耐震木造壁
 －工学部中園真人教授－（朝日：9日）
- ◆ はなっこり－外郎作ろう
 －山口銘菓に個性派－
 産学官が協力
 山口大・県食品産業協議会他代表11人
 （中國：15日）
- ◆ 「移動利便性図る必要」
 QRコードなど活用の観光調査
 山大経済学部観光政策学科篠原淳教授が
 シンポで報告（読売：15日）
- ◆ 過去最多の3000人受験
 山大工学部共同開発 工学系数学統一試験
 （宇部日報：17日）
- ◆ 研究より人命を最優先
 初期消火や消防署への通報
 山口大工学部 学生や職員らが避難訓練
 （宇部日報：13日）
- ◆ 病院内でXマスのタペ
 山大医学部附属病院 幼児や短大生ら演奏
 （宇部日報：14、18日、山口：19日）
- ◆ 顔 第50次南極観測隊の副隊長
 大和田 正明さん
 「謎だらけ。何度でも行きたい」（読売：19日）
- ◆ 山大生の演奏が患者ら和ます－山陽病院－
 （山口・宇部日報：19日）
- ◆ 大学生ら就職活動に意欲
 山口ガイダンスに400人（読売：19日）
- ◆ 山大医学部の先生を囲む会
 22日から福祉会館－精神保健家族会－
 （宇部日報：20日）
- ◆ 心和む音楽で季節感を演出 山大工学部で初
 学生クラブが食堂コンサート
 （宇部日報：20日）
- ◆ 歩数計を貸与山大でも試み
 「メタボ」を未然に防ぐため
 －保健管理センター－（朝日：20日）

- ◆ 製造業技術者 人材育成プログラム完成
 団塊世代の退職問題に対応
 真空工学の実用講座
 山大工学部で来年度、開講
 基礎から応用、実践まで体系的
 （宇部日報：21日）
- ◆ 医学交流会館が完成－霜仁会－
 A E D普及拠点や検査センター
 1月20日 落成式（宇部日報：22日・1月21日）
- 1月**
- ◆ 注目集める「メタマテリアル」
 開発の第一人者、真田篤志さん
 （大学院理工学准教授）
 透明人間になれる！？
 物体に当たった光を反射させず裏側に迂回させる
 夢の材料応用、商品化へ加速
 電波障害の回避など大掛かりな装置なしで可能
 （宇部日報：1日）
- ◆ 世界初の手応えあった
 「人と同じことはしない、過去と同じことはしない」
 －真田篤志さん（大学院理工学准教授）－
 真田さんが開発を進めているメタマテリアルの応用例
 薄型ICタグ スーパーレンズ
 高性能電磁シールド 電波障害の回避
 超高速無線LAN・携帯端末
 車載レーダー（宇部日報：1日）
- ◆ 化学メーカーと共同で臭気調査
 山口大大学院理工学研究科助教
 樋口 隆哉さん
 企業努力で悪臭も軽減（日経：1日）
- ◆ 旅好きは60歳代
 滞在、萩地区が最長
 山口大、ICカード調査（雄飛：1日）
- ◆ 寄稿文 不都合な夢－三浦 房紀工学部部長－
 （宇部日報：1日）
- ◆ 地域との連携を推進－山口大学長丸本 卓哉－
 （山口：4日）
- ◆ 地方国立大受験生確保に躍起－首都圏など－
 “出張”入試を拡大（毎日：4日）
- ◆ 山大医学部長前川 剛志氏が再選
 （毎日・山口：5日、宇部日報：7日）
- ◆ 常盤公園内に共同研究の場
 －山口大学長 丸本 卓哉－（宇部日報：5日）
- ◆ 多くのことを学ぶ必要
 －工学部長 三浦 房紀－（宇部日報：5日）
- ◆ 教育・研究・診療に尽力
 －医学部長 前川 剛志－（宇部日報：5日）

- ◆ **山根・山口大准教授 英会話ユニーク講義**
TOEIC満点にTry
ゲーム感覚で上達「短期間で300点アップ」
(山口:6日)
- ◆ 治療実績と項目解説
外見変化やリンパ浮腫に対処
-県内取り組み-
術後の悩み解消へ
補正下着、かつら常備
-山大医学部附属病院-(読売:6日)
- ◆ 2学部長再任 -山口大- (中國:8日)
- ◆ 第7回やまぐち学フォーラム
日本刀の魅力歴史など紹介
-12日に山口大- (中國:8日、西日本:12日)
- ◆ わくワクWORK～先輩からのメッセージ～
秋吉台丸ごと科学する日々
-秋吉台科学博物館-
山崎 麻里さん=学芸員・大学院理工学研究科
(朝日:10日)
- ◆ 馬さん、博士に認定
-山大大学院学位論文公聴会-
気体溶解技術を研究 (宇部日報:10、12日)
- ◆ 地方国立大就職強化期
企業の求人需用と思惑一致
説明会に力魅力PR
企業側「人材の宝庫」 (朝日:14日)
- ◆ 投稿「自宅で十分に復習の習慣を」
-大学院教授山本 哲朗- (朝日:16日)
- ◆ 肺炎病原菌一括チェック
山口大チーム考案 時間短縮、精度も向上
(読売:12日)
- ◆ **医新薬進 第4部 眼の治療最前線 中**
角膜を取り戻せ
-大学院医学研究科西田 輝夫教授研究室-
[山口大と日本点眼研] 自分の血液から目薬
(日経:17日)
- ◆ 藤井学部長を再任 -山口大経済学部-
(中國・毎日:17日)
- ◆ あすからセンター試験
山大工学部 会場の準備大忙し
(宇部日報:18日)
- ◆ **スポーツ・強くなろうシリーズ③**
-26日 市野球場-
山大医学部・河合名誉教授が講演
(宇部日報:19日)
- ◆ 受験生が会場下見
きょうからセンター試験
(毎日・中國・読売・山口:19日)
- ◆ 緊張した面持ちで
-県内9会場でセンター試験-
(読売・毎日・中國・西日本・山口・日経・朝日:20日)

- ◆ ひとまずホッ センター試験終了-
(読売・中國・西日本:21日)
- ◆ 発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場
-山口大学-
山口大学は7つの学部を擁する地域の基幹
総合大学です。 (読売:21、24日)
- ◆ 「地学や防災教育の貴重な教材」
-大学院理工学研究科永尾隆志准教授-
火山弾を無料提供へ
HPで希望者募集を計画
博物館や研究機関、学校に (読売:24日)
- ◆ 工学部NOW研究アラカルト -山口大-
①循環環境学科教授・工学部長 三浦 房紀
災害時要援護者一斉安否確認システムの
開発 (宇部日報:25日)
- ◆ 国公立大2次試験 受け付け開始
県内も山大など3校
(毎日・山口・中國:29日)
- ◆ 中高生の「仮友」「ネトモ」「鬼ダチ」...
-山口大生が認知度調査-
順位付け便利な道具に いじめ誘発の危険も
人文学部日本語文化論コースの
佐々木翔太郎さん (読売:29日)
- ◆ 「若者言葉センス感じて」
山大・日本語文化論 あす卒論発表会
(読売:30日)
- ◆ 理工に三浦氏再選、医学は西田氏選出
-山口大大学院科長-
(中國・宇部日報:31日)
- ◆ 韓国と協力し電波銀河観測
-4月から山口大- (中國:31日)

表紙説明

教育学部美術教育選修の平成19年度卒業生9人による卒業制作展です。2月21日(木)～2月24日(日)まで山口県立美術館にて開催されました。本年度も個性豊かで多様な表現の作品を展示することができました。美術教育選修では絵画、彫刻、デザイン、陶芸、木工、美術史・美術理論、美術教育の7分野の中から各自、2分野を専攻して卒業制作を行っています。美術や美術教育のための発想豊で多様な表現をめざしています。



平成二十年三月二十五日発行

編集発行 山口大学広報戦略委員会

(総務部 総務課)

住所：山口市吉田一六七七一
電話：(083) 933-5007
FAX：(083) 933-5013
E-mail sh01@yamaguchi-u.ac.jp

(本紙に関するお意見・ご感想をお寄せください)

印 刷：ヨコ二一印刷

広報戦略委員会委員

村田 秀一
(企画広報担当副学長)橋田 隆算
(教育学部 広報担当副学長補佐)草野 芳徳
(人文学部)塩田 正俊
(教育学部)河野 真裕
(経済学部)宮田健一郎
(理学部)武藤 正彦
(医学部)浜本 義彦
(工学部)利部 実
(農学部)長畑 利志
(大学教育機構)近久 博志
(電子公演機・創業支援機構)水谷 勇敏
(大学情報機構)井上 重巳
(事務局)高木 伸也
(アドミッショングセンターセンター)

編集後記

まだまだ冷たい風の中ですが、梅のつぼみがふくらんてきて、春の訪れが待ち遠しい時期になりました。年度末にあたって、今回、ここに「退職記念特集号：第2の人生について」を組ませていただきました。1947年から1949年までに生まれた世代は「団塊の世代」と呼ばれています。60歳が定年の社会では、この春から団塊1085万人の大量退職が始まっています。仕事の重圧から離れることで、これから「最高の十年が始まる」わけですから、その後の生活について思い描くことが多々あります。「住むのは海外、田舎それとも都会」とか、「定年後の趣味遊び・仲間作り」、「新しいことを学ぶ・挑戦する」などさまざまな生活ノウハウについて、定年者たちのHPというのも出ています。

つつがないご退職、本当におめでとうございます。

このところ大学の姿も大きく変わって鍛しきを増してきたために、落ち着いて考える余裕がなかったかも知れません。今後を楽しめる人生のためにも、皆さまの心の準備のほどはいかがでしょう。

(宮田雄一郎)

◎山口大学Webページ <http://www.yamaguchi-u.ac.jp/>